

42510

教科書文庫

4
810
44-1938
20000 42075

1198

Kodak Gray Scale

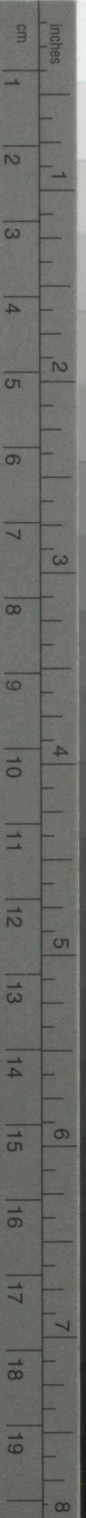
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak

文部省檢定濟



帝國新國文 改版 三年制用 卷二



文部省檢定
昭和三十一年四月二十四日
實業學校國語科

資料室

375.9
Fu10

文學博士 藤村作編

帝國新國文



改版

甲種實業
三年制用

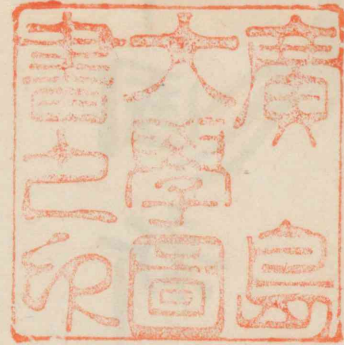
株式會社

帝國書院



(藏所社神崎ヶ松)

圖別袂花梅公菅



帝國新國文

改版

甲種實用
三年制

卷二

目次

- 一 昭和日本の目標
- 二 獨創の國(日本)
- 三 花のさだめ
- 四 朝飯
- 五 築山先生に上る書
- 六 西郷と大久保
- 七 西郷南洲
- 八 松島と象潟
- 九 詩人芭蕉

藤村	平福	本居	島崎	賴山	山本	藤村	松尾	藤村	藤岡
作	穂	宣	藤	陽	有	三	芭	作	東
一	八	一四	一七	二五	三三	四五	四七	五一	五

目次

一〇	芳流閣	瀧澤馬琴	五五
一一	馬琴の心境	芥川龍之介	六一
一二	夏の夜		七二
一三	ベートーヴェンの一生	中澤臨川	七六
一四	小松内府	(平)家物語	八六
一五	隅田川の雨	加藤千蔭	九七
一六	天の香具山		一〇〇
一七	閑居雜記	北村透谷	一〇四
一八	曼珠沙華	近松秋江	一〇七
一九	日野山の奥	鴨長明	一一二
二〇	鍬を持つ英雄		一一八
二一	名月		一二七
二二	長柄堤の曙	坪内逍遙	一二九

二三	恩賜の御衣	(天)三木露風	一三九
二四	青空の鐘	三(平)家物語	一四七
二五	那須與一宗高	上田秋成	一五一
二六	夢應の鯉魚	(増)佐佐木茂索	一五九
二七	新島守		一六五
二八	蜂	上田秋成	一七〇
二九	銀の猫	藤岡東圃	一七九
三〇	歌人西行	藤村作	一八八
三一	日本精神と世界精神	河野省三	一九五
三二	日本民族性の特色	(日)本英雄傳	一九九
三三	將に將たる大將軍		二〇五
三四	梅が香		



一 昭和日本の目標

藤村作

明治維新後の先輩の先見と努力は今日の新日本を建設した。

今日の新日本といふのは在來の東洋の文化の上に立つた日本に、西洋の文化を輸入し、在來の東洋精神の上に立つた日本に、西洋精神を採り入れて出來たものである。明治・大正の六十年間は、全くこの新日本の建設の爲に存したといつてもよからう。實際この六十年間は西洋文化・西洋精神の模倣・輸入・理解・消化に費されたのである。この方針は決して誤つたものではなかつた。而してこの間に於ける先輩の努力は決して少ないものではなかつた。さうして僅かに六十年の間に、西洋諸國が多くの年月を費して成就し得たものを學び取り、輸入し盡くすに至つたのである。物質文化・科學文化の點では、本家の西洋諸國にも、今日では最早多く遜色



明治初年の日本橋

を見ないままに進んだのである。それであるから、明治大正時代を概観するならば、西洋文化の輸入模倣の時代といつても決して過謬ではないと思ふ。明治天皇の維新の始の五箇條の御誓文にも明かに知識を世界に求むることを仰せになつてゐるやうに、明治大正の國民は皆一齊に西洋文化の輸入消化を以てその生活の信條として來た。國民全體がこれを共同の目標として、進行を共にしたればこそ、明治大正時代の大成は來たのである。

然るにここに御代は變つて昭和となつた。昭和の日本もやはり依然として明治大正の日本で可なりであらうか。昭和の國是は、明治大正の國是でよいのであらうか。



昭和時代の日本橋

私の見る所では、世界に國を成すものは、皆他の長所を採ることを一日たりとも怠つてはならない。殊に後れて西洋文化を學び得た我々新日本國民は、將來といへども決して西洋文化の輸入模倣を忽にしてはならないが、併し最早その輸入模倣を以て第一目標とすべき時代は過ぎ去つた。我々昭和の國民はここに新たなる共同の目標を選定すべき立場に在ると思ふ。國民が共同の理想を掲げ、共同の目標に向つて進んでゐる時代は、眞にその國運隆盛の時代である。若し國民がこの共同の理想目標を失うた時は、國家は最も困難の時代にゐることを覺悟せねばならない。

思ふに我が昭和の今日は、最早明治・大正時代の理想目標を以て満足し得なくなつたのである。西洋の摸倣のみでは満足しきれなくなつたのである。故に一國の政治を握るものは、この點に心を致して、ここに共同の理想の光を掲げ、共同の目標をはつきりと認めさせることを先づ以て、今上陛下の御代の初に努めなければならぬと思ふ。これが爲には御大禮は又と得難い好機會であつた。昭代一遇の好機會であつたのである。かういふよい機會を捕へなければ、これを八千萬國民の靈にはつきりと深く彫り附けることは困難である。一遇の好機會を逸し去つたのは残念の事をしたものである。

然らば昭和時代の新國是といふべき、昭和國民の進路に見つむべき共同の目標といふのは何であらう。是を求めることは決して困難の事ではない。又骨折つて探出すべきものならば、それは

容易に國民共同の目標となり得べきものではない。私の見る所では、その目標は決してこれを骨折つて探すまでもなく、極めて平凡なものとして手近い所に在る。否、平凡なればこそ、當然として



今 上 陛 下

國民誰しにも承認され、又手近に在ればこそ、誰が見出したといふこともなく、誰しもが共鳴し得るのである。その目標といふのは、既に今上陛下が朝見式後の勅語の中に仰せられてある「摸擬を戒め創造を励める」ことである。そして余はこれこそは、我々昭和國民が、性の如何に拘らず、職務の如何を問はず、悉くこれを體して進むべき目標であり、理想であると思ふ。

即ち政治・經濟・交通・産業・學術・教育その他萬般の生活の上で、最早西洋の模倣ばかりすることを戒めて、日本民族の獨創を以て日本文化を創造することに勗めることを、八千萬國民の共同の目標として、一致して進むことを最も必要とするのである。

併し我々日本人の獨創の文化を創造するといつても、もとより既に世に存するものを基礎として、その上に建設するより外に行くべき途はあるまい。全くないものから造り出すことは到底出來ないことである。既に在る文化の上に新しいものを築くことならば、それは我々の努力に依つて固より成し得べきである。詳しくいへば、世界に存する二大文化は、東洋文化と西洋文化で、その外にはないのであるから、この二大文化の基礎の上に日本文化を建設する外、道はないと思ふのである。

さて我々は既に千餘年の歲月を経て東洋文化を消化して來、その粹を集めて所有してゐるものである。そして又同時に最近六十餘年の努力で西洋文化をも理解して世界のあらゆる有色人種の中で、最もよく西洋文化を知る所の國民となつたのである。かくして我々は、世界の二大文化を融合・調和し統一するに最も有利な立場に在るものである。

翻つて我が國民性を顧み、我々の祖先が支那・印度の文化を輸入模倣しつゝ、進んで來た跡を見ると、彼等は決して他人の模倣に止り、輸入に満足してゐない。輸入し、模倣したものの上に日本人の息をかけて、他國の文化を改造し、これを我の有にしてしまつてゐる。儒教・佛教の如きにしても、日本の儒教、日本の佛教と化してゐる。この歴史的事實に徴して、將來を考ふれば、我々は東西二大文化を融合・調和し、統一して、その上に日本特殊な文化を建設することを成し遂げ得ない國民ではないと思ふ。我々が創造の精神を

發揮して、東西二大文化の融合・調和より進んで、新日本文化の建設を共同の目標とせよといふのも、決して愚かな強がり、誇大妄想の類ではない。爲政家の探つて以て國是とすべきものであり、國民教育家の教育の理想・目標とすべきものであると信ずる。

二 獨創の國日本

平 福 百 穂



平福百穂

名は貞蔵
秋田縣の人
畫家
昭和九年歿

ヨーロッパを一廻りして來て、つくづく日本に生まれたことを仕合せに思つた。それは、非常に豊富に自然に恵まれてゐることだ。無論、歐洲の自然には、日本の自然には無いところの大陸味はある。けれども、四季の移りかはりはじめ、日本ほど自然から享けてゐるものの豊富な國は、世界に又とあるまい。樹木・草花・果實に至るまで、その種類の多いことは、謂はゞ熱帯から寒帯に至るまでのものが揃つてゐるのだ。山や川や海にしても、島國の常と

して規模の雄大と云ふ點になれば、歐洲大陸に劣るが、溫容あつて麗しく、しつとりと濕ひのあることは、これ又世界に冠たるものである。従つて古來、我が國民は自然に抱擁され、自然に親しみつゝ生活して來てゐるのであつて、それは我々の風俗や習慣を一目すれば明かである。

これに反して西洋のものは、總てが自然との交渉が薄く、氣韻や餘裕などを尊重するよりも、理詰で納得出来る方を選び、極めて人事的方面に發達して來てゐる。自分の専門の繪の方から見ても、西洋では、古い繪と云へば、十四世紀頃からのものが残つてゐるが、それ等は殆ど皆宗教や神話に關するもの、つまり宗教畫が先づその全部を占め、風景畫や靜物畫などは、近世になつてやうやく發達したのである。それまでの繪は、總て人事的で、東洋の繪のやうに、古くから景色や花鳥や獸類などの自然を取扱つたものは、殆ど無

いと云つていゝのである。

併し風景畫や靜物畫が發達したと云つても、その取扱ひ方も矢張り西洋流で東洋に於けるやうに、動物でも鳥でも花でも、自然を樂しむ、つまり鳥や動物等と同化して取扱つてゐると云ふ風なの



春月 (平福百穂筆)

は、無いと斷言出來ないまでも極く稀である。例へば鳥を描くにしても、鐵砲で打殺したのを、吊上げて置いたり、デスクの上に他の靜物と一緒に置いたりして取扱つてゐる。花にしてもさうだ。われわれ東洋人は、雨に傾いてゐるとか、露を含んでゐると云ふ風に、詩情を以て取扱つてゐるが、西洋人は、たゞ色の材料として取扱

つてゐるに過ぎない。詩と現實と諸君は果して何れを取られるぞ。

歐洲の往來を歩いてゐる婦人を見ても、或は流行品を飾りたててゐる百貨店などの飾窓を見ても、美を競ひ粹を争つてゐる筈の婦人用の着物が、模様にしる、色彩にしる餘りに單調で貧弱なことは、意外の感に打たれる。小さな持物や工藝品にしても、非常に單調で變化に乏しいのだ。誰も眼につくやうな極めて複雑な模様のもものも有るには有るが、模様として大して價值あるものとは思へない。

然るに、一度日本の地を踏んで、往來の婦人の帯なり着物なりを見ると、その色彩と模様の餘りに多種多様なことは、他の國々とも比較が出來ない。それと云ふのも周圍の自然が、樹木の種類、四季に咲く花、山川、海等、往來を歩いても旅行しても、寧ろ餘りに變

化の多きに驚かしめるほど豊富なせみである。總てが詩とか哲學的なものを含んでゐるからである。西洋の山は日本の山のやうに、森とした——などと云ふ形容詞を使へたものではなく、總てが薄つぺらである。従つて、美しい豊饒な自然に育まれて來てゐる日本人の審美眼の卓拔なものも、無理はないと肯かしめるのである。

手工藝品なども、小手先の器用と、この審美眼とのために、精巧なことは、遙かに歐洲諸國をしのいでゐる。紙の美しさ、硝子細工の巧みさ、陶器の高雅さ、その他セルロイドの玩具や、三足一圓ぐらゐの靴下、バナマ帽なども、どしどし西洋へ輸出されて、徒らな西洋崇拜の日本人が屢々得意になつて外遊土産として逆輸入して來るところである。

日本人は聰明だ、感受性が強い、一見して摸倣性に富むが如くであるけれども、その鋭い頭腦は、如何なる混亂の中にあつても、さらに新しい獨創にまで到達する能力を持つてゐる。われ／＼日本人は、何故に西洋人より劣るものとして、一にも二にも卑下するのか。日本を知る西洋人こそ、かへつて日本を恐れてゐるではないか。宗教を見よ、醫學を見よ、化學を見よ、何れも摸倣して以て先進國をしのいでゐるではないか。目下、日本は國を擧げて摸倣し、動搖し、混亂してゐるかに見える。しかし、これはやがて、獨創へと踏み出す前提であり、その母胎であるのだ。

藝術に於ても、徒らに西歐諸國に劣るものとして卑屈になるには及ばない。精緻な審美眼と、利鎌よりも鋭き頭腦と、摸倣性と見えてゐる豊かな包容性とは、思想界と同じやうに混亂してゐる藝術界に於ても明日の日の出と共に、新しきものを産み出して行くであらう。

本居宣長

伊勢國松坂の人
國學者
享和元年歿（年
七十二）

三 花のさだめ

本居 宣長

花は櫻。櫻は山櫻の葉赤くてりて細きがまだらにまじりて、花しげく咲きたるは、またたぐふべきものなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見れば、一本毎にいささかかはれるところありて、またく同じきはなきやうなり。すべて曇れる日の空に見あげたるは、花の色鮮かならず。松などの青やかに繁りたるこなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く



花櫻 (筆舟曼村川)

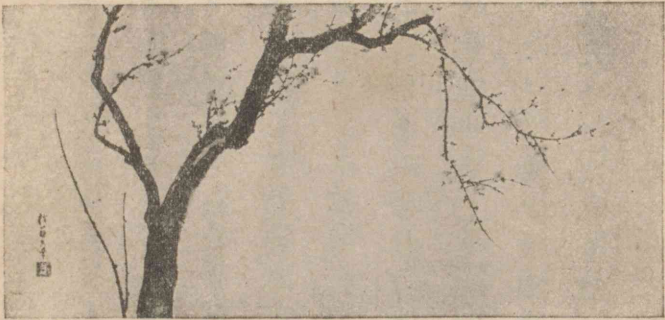
晴れたる日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて、同じ花とも

覚えぬまでなむ。朝日は更なり、夕ばえも、

梅は紅梅、ひらけさしたる程ぞいとめて

たきを、さかりになるままにやう／＼しらせゆきて、見どろなくなるこそいと口惜しけれ。櫻の咲ける頃までも散ること知らで、むげにほひなく、ねびれ萎みて残りたるを見れば、げにありて世の中は何事も皆かくこそと、見る春ごとに思ひ知らるか。白きはすべて香こそあれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さき枝を物にさして近く見たるぞ、こずゑながらよりは

まされる。桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし。



(筆一抱井酒)

梅紅

ありて世の中
のこりなく散る
ぞめでたき櫻花
ありて世の中は
てのうければ
(今古集)

近くてはひなびたり。

山吹・燕子花・撫子・萩・薄女郎花など、とり／＼にめでたし。菊もよき程につくろひたるこそよけれ。餘りうるはしくしたゝかに作りなしたるはなかく／＼に品なくなつかしからず。躑躅・野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふもの、唐めきてこまやかに麗しき花なり。

そも／＼かくいふは皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今やうの世の人のもてはやすめる花どもも世に多かるを、數へいてぬはことさらめきたるやうなれど、歌にも詠みたらず、古き物にも見えたることなきは、心のなしにや、懐かしからず覺ゆかし。されど、それはたひとやうなる僻心にやあらむ。

—玉かつま—

四 朝 飯

島 崎 藤 村

島崎藤村
名は春樹
長野縣の人
文學者

復た五月が來た。測候所の技手なぞをして居るものは誰しも同じ思であらうが、殊に自分はこの五月を堪へがたく思ふ。其日其日の勤務―氣壓を調べるとか、風力を計るとか、雲形を觀察するとか、または東京の氣象臺へ宛て、報告を作るとか、そんな仕事に追はれて、忘れ勝ちに月日を送るといふ境涯でも、あの蛙が旅情をそゝるやうに鳴出す頃になると、妙に寂しい思想を起す。旅だ―かう五月は自分に教へるのである。

いろ／＼なことを憶出すのはこの月だ。ある日のことであつた。丁度自分の休暇に當つたので、事務の引續を當番の同僚に頼むつもりで書いて置いた氣壓の表を念の爲に讀んで見た。天氣晴。上昇。雲形、層、層積、卷層。よし。それ

て自分は小高い山の上にある長野の測候所を出た。善光寺から七八町向ふの質屋の壁は白く日をうけた。庭の内も今は草木の盛な時で、柱に倚凭つて眺めると、新緑の香に壓されるやうな心地がする。熱い空気に蒸される林檎の可憐らしい花、その周囲を飛ぶ蜜蜂の楽しい羽音すべて、見るもの聞くものは回想のなかだちであつたのである。その時自分は目を細くして幾度となく若葉の臭を嗅いで、寂しいとも心細いとも名のつけやうのない――まあ病人のやうに弱い気分になつた。半生の間の歡たのしみしさや哀しさが胸の中に浮んで來た。あの長い漂泊の苦痛を考へると、よく自分のやうなものがかうして今日まで生きながらへて來たと思はれる位。破船――といふより外に自分の生涯を譬へる言葉は見當らない。それがこの山の上の港へ漂ひ着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺め暮す身にならうなどは、實に思ひもよらない變遷なのである。

かう思ひ耽つて居ると、誰か表の方で呼ぶやうな聲がする。何の氣なしに自分は出て見た。

旅籠れのした書生體の男が自分の前に立つた。片隅へ身を寄せて、上り框のところへ手をつき乍ら何か低い聲で物を言出した時は、自分は直ちにその男の用事を看て取つた。聞いて見ると、越後の方から出て來たもので、都にある親戚をたよりに尋ねて行くといふ。はるくゝの長旅、こゝまでは辿り着いたが、途中で病のためだけに限りある路銀を費ひ盡くして了つた。道は遠し懐中には一文も無し、足はこの通り脚氣で腫れて歩行も自由には出來かねる。情があらば助力して呉れ。頼む。かう眞實を顔にあらはして嘆願するのであつた。

「實は――まだ朝飯も食べませんやうな次第で。」

とその男は附足して言つた。

この「朝飯も食べません。」が自分の心を動かした。顔をあげて拜むやうな目付をしたその男の有様は、と見ると、體軀の割合に頭の大らかな下顎の圓く長い、何となく人の好ささうな人物、日に焼けて、茶色になつて、汗の少し流れたその痛々しい顔の上には、確かに落魄といふ烙印が押しあてゝあつた。悲しい追憶の情は、その時、自分の胸を突いて湧き上つて來た。自分も矢張りその男と同じやうに飢と疲労とで慄へたことを思出した。目的もなく彷徨ひ歩いたことを思ひ出した。恥を忘れて人の門に立つた時は、思はず涙が頬をつたつて流れたことを思出した。

「まあ君、そこへ腰掛けたまへ。」

と自分は馴々しい調子で言つた。男は自分の思惑を憚るかして、妙な顔して、たゞもう悄然と震へ乍ら立つて居る。

「何しろそれは御困りでせう。」と自分は言葉をつけた。「僕の家では、君、かういふ規則にして居る。何かしら爲て來ない人には、決して物を上げないといふことにして居る。だつて君、さうぢやないか。僕だつて働かずには生きて居られないぢやないか。その汗を流して手に入れたものを、たゞで他に上げるといふことは出來ない。貰ふ方の人から言つても、たゞ物を貰ふといふ法はなからう。」

かう言ひ乍ら、自分は十錢銀貨一つ取出して、それを男の前に置いて、

「僕の家ばかりぢやない。何處の家へ行つてもさうだらうと思ふんだ。たゞ呉れろと言はれて快く出すものは無い。これから君が東京迄も行かうと言ふのに、そんな方法で旅が出来るものか。だからさ、それを僕が君に忠告してやる。何か爲て働いてそれか

ら頼むといふ氣を起したらば如何かね。」

「はい」と男は額に手を當てた。

「こんなことを言つたら、妙な人だと君は思ふかも知れないが——」と自分は學生生活もしたらしい男の手を眺めて「僕も君等の時代には、随分困つたことがある——」そりやもう、辛い目に出遇つたことがある。丁度君が今日の境遇を僕も通り越して來たものさ。さもなければ君、誰がこんな忠告なぞをするものか。實際君の苦しい有様を見ると、僕は大いに同情を寄せる。まあ僕は哭きたいやうな氣が起る。眞實に苦しんで見たものでなければ、苦しんでゐる人の心地はわからないからね。そこだ。もし君に僕の言ふことを聞く氣があるなら、一つ働いて通る量見になりたまへ。何か君に出来ることがあるだらう。——まあ、歌を唄ふとか、御經を唱げるとか、または尺八を吹くとかさ。」

「どうもこれと言ふ藝は御座いませんですが、尺八なら少しはひねくつたことも——」と男は寂しさうに笑ひ乍ら答へた。

「む、尺八が吹けるね。それ見給へ、さういふ藝があるなら賣るが可いぢやないか賣るべし。無くてさへ賣らうといふ今の世の中に、有つても隠して持つてゐるなんて、そんな君のやうな人があるものか。ではかうするさ——僕が今、君に尺八を買ふだけの金をあげるから粗末な竹でも何でもい、一本手に入れて、それを吹いてそれから旅をする、といふことにしたまへ——兎に角これだけあつたら譲つて呉れるだらう——それ十錢上げる。」

かう言つてそこに出した銀貨を男の手に握らせた。

「人の一生といふものは君、どうなるか解らない」と自分は男の顔を熟視^{みま}り乍ら言つた。「これから將來、君がどんな出世をするかも知れない。僕がまた今日の君のやうに困らないとも限らない。」

十錢上げる
本文は明治四十
年の作で當時こ
の地方では十錢
で尺八を買ひ得
たのであらう

まあ君、左様ぢやないか。もし君が壯大な邸宅でも構へるといふ時代に、僕が困つて行くやうなことがあつたら、その時は君、宜敷頼みますぜ。」

「へ、へ、へ、へ」と男は苦笑ひした。

「いゝかね。僕の言つたことを君は守らんければ不可よ。尺八を買はないうちに食つてしまつては不可よ。」

「はい食べません——決して食べません。」

と男は言葉に力を入れて、堅く／＼誓ふやうに答へた。

やがて男は元氣づいて出て行つた。施與といふことはこんなもので、施された人も幸福ではあらうが、施した當人の方は尙更心嬉しい。自分は饑ゑた人を捉まへて、説法を聞かせたと氣付かなかつた。「十錢呉れてやつた上に、助言もしてやつたし、まあ、二つ恵んでやつた」と考へて自分のした事を二倍にして喜んだ。五月

—追憶の五月—寂しい旅情は僅かにかういふことで慰められたのである。

しばらくして、水汲みから歸つて來た下女に聞くと、その男は自分の家を出ると、直ぐに一ぜんめしの看板をかけた飲食店へ入つたといふ。その時自分は男の言葉を思出して、「まだ朝飯も食べません」と繰返して笑つた。定めし男の方でも、自分の言葉を思出して、「説法も有難いが、朝飯の方が尙更有難い」とかなんとか獨語を言ひ乍ら、その日の糧にありついたことであらう。—現代小説全集—

五 築山先生に上る書

頼 山 陽

幸便に任せ一筆申上げ、奉り候。残暑の節益々御勇健に御座あそばされ候ことと存じ奉り候。

去臘は色々と御世話下され、御別の刻も御親切の條々、肝に銘じ

頼山陽
名は襄
安藝の人
江戸時代の學者
天保三年歿(年
五十三)
築山先生
通稱嘉平
山陽の武道の師

父
名は惟寛
號は春水
安藝の人
藩の儒官をつと
めた
文化十三年歿

忘れ難く候。さてこの度内々心事申上げ度き儀これあり候。誠に父儀土民より御取立を被り、外諸士よりも御國恩海山に御座候へば、その子たる者粉骨壘身仕り候て御奉公申すべき筈に御座候ところ、只今の身分に相成り致し方これなく又假令再び御使下され候儀萬一出来仕り候とも、生得多病弱質、少しの事にも耐へ兼ね候故甚だ覺束なく、強ひて相勤め候ては、却つて事を傷り、不忠不孝を増し候やうのこと出来致し候やも測りがたく、且又私一家重疊に官祿を忝う仕り候故、一人は浪人仕る方、天道にもかなひ申すべく候はんか。又奉公仕らずとも、御報恩のいたし方これなしとは申すべからず候。經書講釋等は不得手の儀、得手と申しては史學文學に御座候。これにて少々なりとも御國の御用に相立ち候儀仕り度く、乃ち籠居以來日本外史と申す武家の記録二十二卷著述成就仕り居り候へども、これは區々たるものにて、引用の書ども不

Yon
三六



自由、私心に満ち申さず候。愚父壯年のころより、本朝編年の史輯め申し度き志に御座候ひしが、官事繁多にて、十枚ばかり致し置き候まゝにて相止め候。私儀幸ひ閑人に御座候故、父の志を継ぎこの業を成就仕り、日頼本にて必要の大典は藝州の書物と人に呼山ばせ申したき念願に御座候。この儀三都陽に居り申し候て、書物を廣く取り集め、多聞の友を多く取り申さずては出来仕らぬことに御座候。水戸の日本史なども、江戸に史館御建てあそばされ候はこのわけに御座候。不肖の私に御座候へども、右の場所へ出で、名儒俊才に附合も致し、學業成就、名を天下に揚げ、末代までも、藝州に何某と呼ばれ候はゞ螢火にて月光を増し候譬にて、すこしは御國の光ともなり申すべきか。

去冬此方へまゐり候件、私好み申さざる事に御座候へども、已に家長より願ひ出で候儀、今更辭退も仕りがたく、急に追ひ立てられ罷り越し候。誠に草原にて馬子牛飼の外は談話仕り候べき人もこれなく候。廣島に居り候ひし節は、また時節もこれあり候はゞ都會へ出づることとやと、空頼みに存じ候ひしが、今はその頼みも絶え果て候故、日夜悲歎仕り居り候。

然る處福山の公邊にて私を取り放し申さざるやうと、役人共かれこれ談合仕り、私に知行取らせ、士儒に取り立て申したき旨、内意菅先生より申し聞かせられ候。先生には、私所存をば承知これなく承引仕るべき旨勸められ候。私答へ候に、これは、案外のこと承はり候。私奉公出来候身に候はゞ本國にて仕り申すべき筈なれば、如何やうの御勸にても、決して従ふべきやう御座なしと答へ候に、これは小國故さらひ候か。小國にても俸祿はよろしと申され

福山の公邊
備後福山藩
藩主阿部氏

菅先生
通稱太中、茶山
と號した
備後の人
著名の漢詩人

加賀

加賀藩

前田氏

薩摩

鹿兒島藩

島津氏

筆蹟

雲耶山耶吳耶越
水天琴弗青一髮
萬里泊舟天草洋
煙橫蓬窓日漸沒
瞥目大魚波間跳
太白當船明似月
西遊舊作書爲
山内彈正公子
時己丑九月去
遊時己十二年癸

雲耶山耶吳耶越 水天琴弗青一髮 萬里泊舟天草洋 煙橫蓬窓日漸沒 瞥目大魚波間跳 太白當船明似月

山陽筆蹟

天下の人に對し申すべきかと申し切り候。

右様の儀は幾重にも相ことわり、この方申分相立て候こともこれあるべく候へども、私多年の願望遂げ候期はこれなきやうに相見え候。何分年少氣銳のうち一度大處へ出で、當世の才俊と呼

叔父
春風・春坪等

太中
菅茶山

ばれ候者共と勝負を決し申し度く存じ奉り候。家父叔父共は御承知の氣遣ひ手に御座候故、とかく手放し候こと致しかね、爰許にても兄弟同様の太中にあづけ置き、その中に年も寄り候はゞ分別



菅茶山

なほり申すべしと心組み候へども、私は若氣のみにてはこれなく、前段の大志御座候故に御座候。この念願と申すも、人に少しも世話をかけ、物入をさせ候こともこれなく、唯一言の許を受け候はゞ、私一分の才覺を以て一人口

喰ひ候ことは如何とも仕り、家元よりの仕送等は一錢も煩はし申さぬつもりに御座候。家父老年に相成り候て、他處へ罷り越し候儀いかゞに御座候へども、此處に居り候も、京・大阪へ參り居り候も、五十歩百歩のちがひ

に候。此處にかれこれと月日を積み候うち、菅先生養育の恩義は日々重り候て、去り難く相成り申すべく、さりとても多年の念願無に仕り候も、残念至極いか、が仕るべきかと案じ煩ひ居り申し候。何卒尊公様の御憐愍にて人一人御救ひ下され、本意を遂げさせ下され候ことは出来申すまじくや。さやうにも相成り候はば、英氣は百倍仕り、多病の身も學問出精、天下の人に一人も追いつかせ申さざる料簡に御座候。かやうの存念、廣島にをり候ひし節より申し上げ度く存じながら、憚多く時節も到來仕らずと存じ、黙止仕り居り候へども、尊公様ならではこの儀御決斷下され候人は、これなく候故、この度憚をも顧みず、生涯の浮沈と覺悟相極め申し上げ候。懼れながらよくよく御勘辨下され、何卒尊公様の御心附として仰せ出され下さるべく、もし尊公様御取計にて私生涯の大望御遂げさせ下され候はゞ、この御恩生々世々忘却仕るまじく候。

心事盡し難し、萬々御推察遊ばされ下さるべく候。頓首敬具

六 西郷と大久保

山本有三

山本有三
名は勇造
栃木縣の人
文學者

大久保邸客間

床に

相看兩不厭

只有敬亭山

と大書した幅が掛かつてゐる。

伊藤(博文)が椅子にかけて待つてゐる。稍待ちくたびれた形で、幅な
どを見てゐる。

家令が這入つて来る。

家令大變お待ちを願ひまして。もう間もなくお歸りになると存
じますが……

伊藤いや。——先程から感服してゐるんですが、見事を書ですな。

(幅の近くに寄り)

雪蓬といふのはどういふ人です。



伊藤博文

家令何でも西郷さんが沖の
永良部島へ鳥流しにお
なりになつた時、この方
もそこにおいでになつ
たので、お知合ひになつ
たのだとか伺つて居り

ます。たしか西郷さんはこのお方から、いくらか書をお習ひ
になつたのぢや御座いませんかな。

伊藤ふム。それにこの句がいゝ。「相看て兩ら厭はず。只敬亭山
有り。」實にいゝ句だ。

家令雪蓬といふ方は、この李白の詩が大層お好きで、筆をお執りになると、この句ばかりお書きになるんださうです。——あ、お歸りになりました。

大久保が這入つて来る。

大久保 どうも不在にして御無禮しました。何か急用ですか。

伊藤 少々御意嚮を伺ひたいことが御座いまして。

大久保 さうですか。勝さんと話が長くなつたものだから……

伊藤 あ、あの件ですか。如何でした。お引受けになりましたか。

大久保 それは引受けて貰つたさ。征韓派の面々が去つた後、すぐに後継内閣が組織出来ないやうであつては、天下に面皮がないではありませんか。なかに、五參議が揃つて辭職しようとも、何の事もありはしません。

伊藤 實はその後任問題について上りましたのですが、西郷さんの

辭表はどう裁きましたものでせう。

大久保 それは昨日岩倉公に御返事を差上げてあります。

伊藤 辭任を聴き届けよといふのでございませう。併し外の方と違つて、西郷さんでございますからな。岩倉公も一方ならぬ御心配で、是非ともお差留めに相成りたいと仰せになつてをりますのですか……

大久保 いや、引留める要はありません。止めたいといふものは止めさせる方が却てよろしい。その方が當人のためです。

伊藤 けれども、それは如何にも忍びないことですから……

大久保 いや、無駄な手数は省くことです。第一、引留めようとして留るやうな西郷ではありません。現に黒田が行つてさへ徒勞だつたのではありませんか。

伊藤 それはさうですが……

大久保陸軍大將だけは従前の通りといふことにして、参議並びに近衛都督はお役御免になされるのが、この際至極の御處置と思ひます。

伊藤(なほ躊躇しながら) それでよろしうございますかな。

大久保(きつぱり) よろしいで

すとも。



大久保 西郷 通利保

大久保 西郷さんの辭表が出た時、僕はあなたこそ第一にお引留めになる御方と思つて居りました。

御意見の相違は相違。これはこれで、また別ですからな。

大久保 いや、この際は引留めないのが本當です。彼を引留めない者こそ、彼を最もよく知つてゐるものといふべきでせう。

氣まゝにさしておやりなさい。その方が却て西郷もうるさくないでせう。

伊藤 さうですか。

大久保 わたしはいつかはかういふ日の來ることを臆げながら豫期してゐました。今回の事がなくとも、これは早晚免るゝことの出來ないものです。それが今來たまでです。このことは戊辰の役に於て、鐵砲の音がはたと止んだ瞬間に、わたしは豫感したことです。わたしと西郷とは兩立し難い人間です。例へば冬と夏とのやうなものです。二人は當然離るべき運星なのです。

伊藤 併しお二人は今日まで、殆ど一體のやうになつてお働きになつたのではありませんか。

大久保 御一新前まではさうでした。世の中が不順であつたからで

す。夏のさ中に、雪が降るやうな時勢であつたから、それが目立たなかつたのです。けれども物事が緒について、時候が追追定まつてくれれば、夏は夏、冬は冬、それ／＼その位置に返るのが順當でせう。そして夏は夏らしく、冬は冬らしくあつてこそ、然るべきものだ、わたしは思つてゐます。

伊藤 西郷さんも、さう思つておいてでせうか。

大久保 さ、西郷はどう思つてゐますか。

間。

大久保 伊藤君、西郷が今度、どうして、あんなに向むきになつたのか、知つてゐますか。

伊藤 向になつたといひますと……

大久保 あの男はいつも黙々としてをつて、滅多に自分の意見を吐かない男です。わたしが見込を述べると、汝むのいゝやうに、さ

う云つて、決して逆つたことがありません。功は人に譲り、自分分はうしろに引下つてゐるといふ性質の人間です。それが今度の御評議に限つて、どうしてあんなに突張つたのか。君はそこに氣がつかまへんでしか。

伊藤 自身の御持論を飽くまでも御主張になつたものと私は思つてをりましたが、……

大久保 それは無論さうです。併し伊藤君、西郷は實に死にたかつたのですよ。朝鮮を自分の死場所にしたかつたのです。

伊藤 無言。大久保の顔を覗くやうに見る。

大久保 あの男は死を急いでをるのです。いつか私にこんなことを言つたことがあります。「己はもう、一度死んだのだから、天地に家はないのだ。」知つてゐるでせう。彼は月照和尚と海に投じて、自分だけ助かつた、あの事をいふのです。

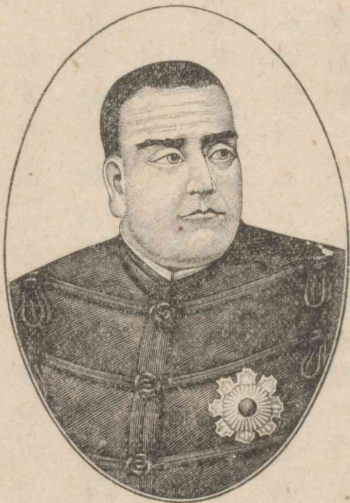
月照
京都清水寺成就
院の住職
安政五年十一月
隆盛と共に海に
投ず

順聖公
島津齊彬
安政五年歿

三郎公
齊彬の弟
島津久光
明治二十年歿

伊藤存じてゐます。

大久保それからまた、自分を取立て、下すつた順聖公様がおかくれになつた時、西郷は追腹を切らうとして果さなかつたこともあるのです。それやこれやで、自分は主におくれ、同志におく



四郷隆盛

伊藤なるほど……

れてゐるといふ慚愧の念が、絶えず頭にあるのです。その上現在の三郎公にはひどく疎まれてをりますし……

大久保ですからどうせ捨てる生命なら、朝鮮に行つて捨てたい。そして自分の屍を橋渡にして、若い軍人どもを働かしてやりたい。手柄を立てさせてやりたい。かう西郷は思つてゐるの

です。わたしは彼のさうした心の中を思ふと、實際死なしてやりたく思ひます。死なしてやることが、むしろ西郷を生かしてやることのやうに思ひました。併しわたしまでが、そんな心に引き入れられるやうであつてはなりません。どんなことをしても、西郷には生きてゐて貰はなくつてはなりません。國家の大局からは申すまでもなく、西郷一身のためから申しても、斷じて彼を死なせることは出来ません。西郷は恐らくわたしを怨んでゐるでせう。併しどんなにどんなに怨まれても、わたしは彼を殺すわけにはいきません。——ところが伊藤君、わたしは嘗て西郷に死を迫つたことがあるのですよ。

伊藤あなたがですか。それはいつものあなたにも似合はない振舞ですな。

大久保わたしも若かつた。それはもう十何年も前の話です。丁度西郷が大島から召還されて、三郎公のお伴をして京へ上る時のことでした。殿にはもとく御覺えがよくないところへ、憂國の心からとは申せ、お言付を待たないで、西郷が少し取計つたことをしたために、彼は忽ち召捕られるやうな羽目に立至つたのです。わたしはその時つくく世の中が厭になりました。一心同體の西郷がこんなことになつては、もう討幕の望みも何も無い。こんな位ならいつそのこと、二人刺し違へて死んでしまつた方が増しだ。さう決心して、彼を濱邊に誘ひ出したことがあるのです。――

伊藤それが今度は、思はない事で刺し違へてしまつたわけですね。大久保人生の事思議すべからずです。西郷は月照と死なうとして死ねなかつた。わたしは西郷と死なうとして死ねなかつた。

西郷がいつかわたしにいつたことがあります。人間は死なうとしても中々死ぬるものでなく、生きようとしても案外生きられないものだ。それを聞いた時には、それ程にも思ひませんでしたが、わたしは今その言葉をしみく思ひ出します。書生が這入つて来る。

書生あの西郷さんがお歸りになつてしまつたさうです。

大久保國へか。

書生はい。たゞ今役所から知らせて参りました。

大久保さうか。――とうく歸つてしまつたか。

伊藤すると西郷さんへの辭令は、どうしてもあなたが仰しやつた通りにする外はありませんな。

大久保(うなづく)。

伊藤では、私は早速歸つて、岩倉公に復命いたしませう。

伊藤去る。
大久保書生を呼ぶ。

大久保おい、その掛物を掛け變へてくれ。
書生何を掛けませう。

大久保何でもいい。南洲のものを掛けてくれ。

書生幅を掛けかへる。それは

「盡人事、竣天命、南洲書」

と書した一軸である。

書生これでよろしうございますか。

大久保うん。

書生去る。

大久保しづかに立つて床の間に香を焚く。

夕暮と共に部屋の中が次第に暗くなる。併し外はまだ明るく、西
日を受けた障子に庭の松影が黒々とうつつてゐる。

大久保じつと黙したまゝである。

幕

—山本有三全集—

一四 西郷南洲

安政五年の霜月なかば、

月影碎くる薩摩のせとの

波間に沈みし劔頸の友

一人は死して大義に殉し、

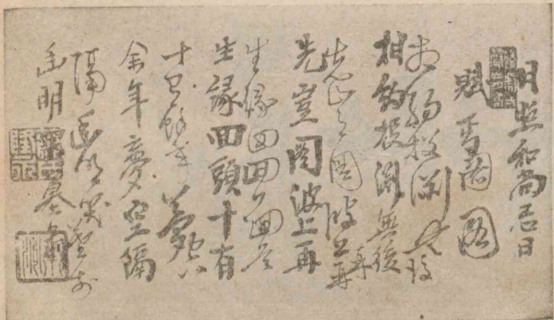
くしくも君はよみがへり、

宏謨を翼けて素志を成しぬ。

哀れは盡きせず、懐往の詩。

相約投淵無後先 豈圖波上再生縁

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

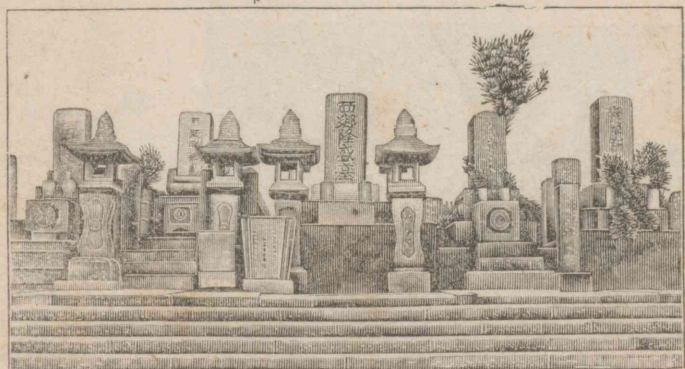


西郷盛隆筆蹟

藤村作

新新 同天 大久保

自ら危き使に死して、
 國威の張るべき基を立つと
 至誠をこめたる征韓の論、
 破れし恨残さぬ心、
 再び世事を口にせず、
 都督の大任辭して去りぬ。
 逸情見るべし村莊の詩。
 我家松籟洗塵縁、滿身清風身欲仙、
 誤作京華名利客、此聲不聽已三年。
 死所を求めて死所に遭はず、
 笑つて殘骸子弟にゆるし、



墓の等弟子のそび及盛隆郷西

松尾芭蕉

伊賀國上野の人
俳人

元禄七年歿(年
五十二)

洞庭
中華民國湖南省
北方の大湖

賊の名負ひつゝ世を去りし君、
 得喪毀譽のほだしを斷ちし、
 あゝ我が無我の英雄の
 高風誰かは慕はざらん。
 尊ぶべきかな、述懐の詩。

幾經辛酸志始堅、丈夫玉碎慚軛全、
 我家遺法人知否、不爲兒孫買美田、

八 松島と象潟

松尾芭蕉

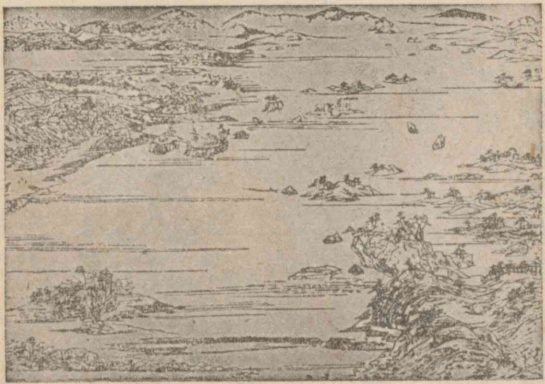
松島

日既に午に近し。舟を借りて松島に渡る。その間二里餘。雄
 島が磯に着く。
 抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西

西湖
中華民國浙江省
に在る湖
洞庭と共に有名
な勝地
浙江
錢塘江

大山つみ
大山津見神
山を掌る神

雲居禪師
希膺
瑞巖寺中興の僧
萬治二年寂



(芭蕉翁繪詞傳)

湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。島々の數をつくして、欵つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。松あるは二重にかさなり、三重にたたみて、島左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるが如し。その景色宵然として、美人の顔をよそふ。ちはやぶる神のむかし、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞をつくさん。

雄島が磯は地つづきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に世をいとふ人も稀々見え

侍りて、落葉松笠など打ちけぶりたる草の庵、閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづなつかしく立寄るほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心ちはせらるれ。

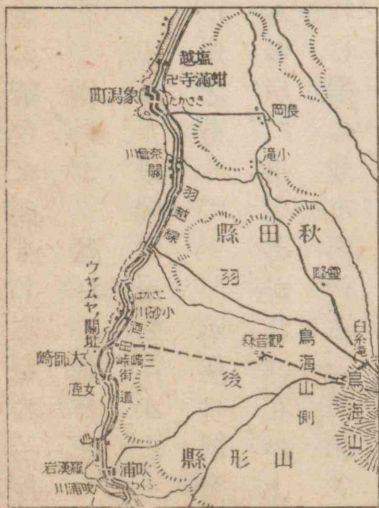
松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

象潟

象潟
秋田縣西南部の
名勝地
今の象潟驛附近
の地

江山水陸の風光、數を盡くして、今象潟に方寸を責む。酒田の港より東北の方山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、その際十里、日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として、鳥海の山隠る。闇中に



象潟地方地圖

雨も亦奇なり
水光激瀾 晴偏
好。山色空濛
雨亦奇(蘇軾)

花の上漕ぐ
象潟の櫻は波に
うづもれて花の
上漕ぐ海人の釣
り舟(西行)



五月の雨の象潟

摸索して、雨も亦奇なりとせば、雨後の晴色又頼もしと、蟹の苦屋に膝を容れて、雨の霽るゝを待つ。その朝天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほど、象潟に舟を浮かぶ。まづ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花の上漕ぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を残す。江上に御陵あり、神功皇后の御陵といふ。寺を干満珠寺といふ。この處に行幸ありし事未だ聞かず、いかなる事にか。この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、その影うつりて江にあり、西はうやむやの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに海北に構へて、波打ち入るる所を汐越といふ。

江の縦横一里ばかり、倂松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施が合歡の花
汐越や鶴はぎ濡れて海涼し

―奥の細道―



九 詩人芭蕉

藤岡東圃

藤岡東圃
名は作太郎
金澤市の人
國文學者
文學博士
明治四十三年歿
(年四十一)
白樂天
字は居易
唐の詩人
寒山子
唐の詩僧

革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾桃青なり。桃青又芭蕉と號す。伊賀上野の人。初、その地の城代藤堂氏に仕へしが、後、主家と世事とを謝して専ら風流三昧に入る。その俳諧の經歷を尋ねれば、まづ京に出て北村季吟の門に古風を學び、又流行を追うて檀林風を弄ぶ。芭蕉もとより學才あり。詩にありては白樂天の平易、寒山子の禪機を喜び、別けて李杜の風格を慕ふ。

李
李白
字は太白
唐の詩人

杜
杜甫
字は少陵
唐の詩人

西行
俗名佐藤義清
建久元年寂

桃青の稱も李白と相對せしめんが爲なりと傳ふ。わが國にては最も西行に私淑して、その山家集によりてこそ正風の眼は開けたれ。旅行の癖も亦この自然詩人に負ふところあり。後年江戸に



松尾芭蕉 (筆風杉山杉)

從來蹈襲の俳句に臨めば、造化の隱微を究め自然の祕鑰を開くべき詩の本義いづこにありとも知らず。この玩具の如き文學の形式によりて胸裡に鬱勃たる感情と、目睫に映じ來る森羅萬象とを

る。げにも抖擻行脚は芭蕉が一生の行樂、諸國の名所舊跡にして彼の詩囊に入らざるもの幾何かある。かゝる經驗を以て

寫さんとすれば、茫然自失せざらんと欲するも得んや。李杜西行

筆蹟
ふる池やかはづ
飛こむみづの音
芭蕉桃青

筌蹄
筌者所_レ以_レ在_レ魚
得_レ魚而忘_レ筌
蹄者所_レ以_レ在_レ兔
得_レ兔而忘_レ蹄
(莊子外物篇)



の詩歌は、さすがに宇宙の玄理を解して人生の奥底に觸れ、千載の後讀者をして光風霽月の襟度を偲ばしむ。されど國異なれば言語同じからず、星移れば人情もまた變ず。彼等が詩形、美は美なりといへども直ちにわが筆に入らず、即ち之を今に用ひんや。筌蹄は問はず、魚鳥を狙へ。月をだに忘れずば、指自ら指さん

月雪花紅葉とも限らず、見るものにつけ感興の浮ぶがまゝに打出し、先哲の跡を見ずして、その意を見る。さては、ふる池や蛙飛び込



む水の音の一句に至りて、忽然として轉迷解悟の境に入れりといふ。この一句、詩としての價値はさばかりに高しともおもはれず、ただ芭蕉が經歷の上より見て、すなはち無量の妙味あり。今日まで彼が費せる千思萬考、皆たゞこの境に臨んで即ち應ずる一味の筈蹄を得んがために外ならざりけり。中心の感情は本、技巧の波文は末たるべしといへる年來の所説は、こゝに至りて動かすべからざる自信となれるなりけり。

芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化す。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり。華實併せ得んことを欲して苦心慘憺たりしはその中なり。切磋琢磨の功を終へて、思ふところ却つて平易に、言ふべからざる輕味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして盛唐の詩、西行の和歌と比較して軒輊すると

ころなきに至らしむ。翁もまた偉なるかな。

—國文學史講話—

芳流閣

瀧澤 馬琴

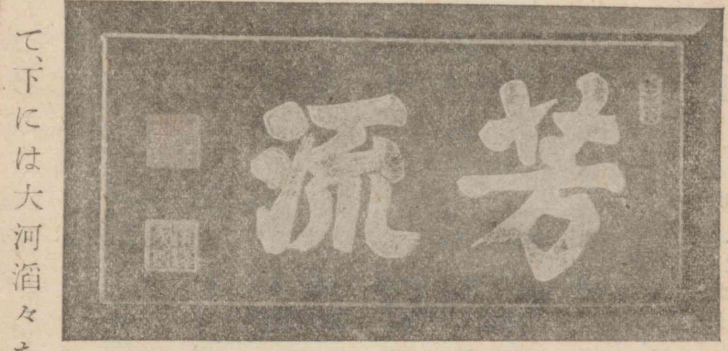


瀧澤馬琴
名は呼
曲亭・馬琴・著作
堂等と號す
江戸時代の小説
家
嘉永元年歿（年
八十二）

澁我
下總國猿島郡古
河町

古の人謂はずや禍福は糾へる繩の如しと。人間萬事往くとし、て塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐れむべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身に傳けつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々澁我へもたらして、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる、村雨の刃は舊の物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾をこゝに釋くよしもなく、緝急にして意外にあり。僅かに當座の辱しめを避けばやと思ふばかりに、影の圍を殺開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ上れども、左右に、脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を究

めたる心の中はいかなりけん想像るだにいと痛まし。



瀧 澤 馬 琴 半 蹟

されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあら
ずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福
我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀
犬塚信乃を搦めよとて、懟に擇み出だされつ。
他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願
はしからずと思へども、推辭みて許さるべく
もあらぬ、君命重し、彌高き彼の樓閣は三層な
り。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて
登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく、
堪へ難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾
蒸の燄熱を渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似
て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に朝、溯洄は名に負ふ坂東

成氏
古河公方足利成
氏
横堀史在村
成氏の老臣

墨氏
墨翟
周の人
魯般
公輸般
魯の人

太郎、水際の小舟楫を絶えて、進退すてに谷りし、敵にしあればいか
でわれ、繋ぎ留めんと、颯の、樹傳ふ如くさらく、と、登りはてたる三
層の、屋根には目柴、翳す由もなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視へあうて
立つたる形勢、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の窺ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻
を打ち掛けて、勝負いかにと見上げた。又只閣の東西には、身甲
したる許多の士卒、槍長刀を見かし、或は箭を負ひ、弓杖突き立て、組
んで落ちなば、撃ち留めんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外
面は、綿連として杳かなる河水、繞りて砌を覆せば、借使信乃武事長
け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、
虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべ
くもあらず。渠鳥ならずとも、羅に入りぬ、獸ならずも狩場に在り。
三寸息絶ゆれば、絆みな休まん、脱れはてじと見えたりけり。

膳臣巴提便
 欽明天皇の六年
 百濟に使した時
 虎穴に入つて虎
 を刺殺した
 富田ノ三郎
 和田義盛の臣
 源實朝の面前で
 大鹿の二本の角
 を一度に折つた

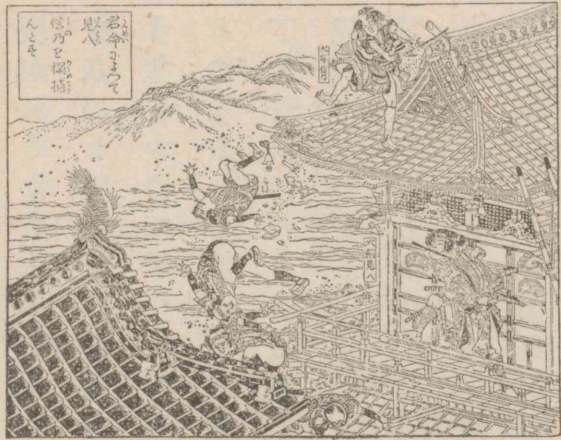
その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで追ひ登らんとせし
 兵等を砍落しつる後は、絶えて近づく者なきに、今たゞ獨り登り來
 ぬるは、世に覺えある力士ならん。這奴はこれ、膳臣巴提便が虎を
 暴にする勇あるか、また富田三郎が鹿の角を裂く力あるか。遮莫
 一個の敵なり、引組んで刺送へ、死するに難き事やはある。よき敵
 にこそ御座んなれ、目に物見せんと血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬
 の如き方桴に、立つたる儘に寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、彼
 の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めか
 ねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役義に、擇み出ださ
 れし甲斐もなし。搦め捕るとも、撃たるとも、勝負を一時に決せ
 んものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御詫さふと呼び掛け
 て、拿たる十手を閃かし、飛ぶが如くに方桴の、左の方より進み登り
 て、組まんとすれども寄せつけず。心得たりと、鋭き太刀風に、撃つ

を發石と受け留めて、拂へば透かさず數刀尖を、枉へて流す一上一
 下、下る藁を踏み駐めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練

芳流閣上の戦

の働き、炭より落す太刀筋を、あちこ
 ち外す虚々實々、未だ勝負をわかざ
 れば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握
 らざるもなく、瞬きもせず氣を籠め
 て、見る目もいと、迥かなり。

(原本挿繪)



深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に戦ふ時、沛然として雲
 起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と

見るばかりなる、いと高閣の棟にして、死を争ひし爲體、よに未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖脇當のはづれを、裏かくまでに切り裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初めに浅痕を負ひしより、漸々に疼みを覺ゆれども、足場を揣りて、撓まず去らず、壘みかけて撃つ太刀を見八右手に受け流して、返す拳につけ入りつゝ、やつと被けたる聲とともに、肩間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け留むる、信乃が刃は鏗際より折れて遙かに飛び失せつ。見八得たりと無手と組むを、~~が~~がまゝ左手に引き着けて、迭に利腕楚と取り、振ぢ倒さんと曳聲合はして、揉みつ揉まるゝ力足、此彼ひとしく踏み込らして、河邊の方へ滾々と身を輒ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣に、削り成したる蔓の勢ひ、止まるべくもあらざれど、迭に拿つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らて程もよし、水際に繫げ

る小舟の中へ、打累りつゝ、挫と落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙纜丁と張り断りて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出だされつ。爾も追風と虚潮に、誘ふ水なる洞舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一一 馬琴の心境

芥川龍之介

弓張月

東京市の人
文學者
昭和二年歿（年
三十六）



弓張月

樺説弓張月
源爲朝を主人公
とした小説
馬琴傑作の一
南柯夢
三七全傳南柯夢
傳奇小説
馬琴傑作の一

「これは初から書直すより外はない。」

馬琴は心の中でかう叫びながら、思々しさうに原稿を向ふへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き「南柯夢」を書き、さうして、今現に「八犬傳」を書きつゝある。この上にある端溪の硯、蹲螭の文鎮、臺の形をした銅の水差、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、そ

これらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が彼の一生の勞作に暗い影を投げるやうな、彼自身の實力が根本的に怪しいやうな忌はしい不安を禁ずることが出来ない。

「自分はさつきまで本朝に比倫を絶した大作を書くつもりであった。が、それもやはり事によると人並に己惚の一つだつたかも知れない。」

かういふ不安は彼の上に何よりも堪へ難い落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には常に謙遜であることを忘れるものではない。が、それだけに、又同時代の屑々たる作者輩に對しては傲慢であると共に、飽くまでも不遜である。その彼が結局、自分も彼等と同じ能力の所有者だつたといふことを、さうして更に厭ふべき遼東の豕だつたといふことをどうして易々と認められよう。しかも彼の強大な「我」は、「さとり」と「あきらめ」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

遼東の豕
遼東有豕、生子白頭。異而獻之、行至河東。見群家皆白、懷厭還。
(漢書、朱浮傳)

彼は机の前に身を横たへたま、親船の沈むのを見る難破した船長の眼で失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた。若しこの時、彼の後の



瀧澤馬琴

襖がけた、ましく開けはなされなかつたら、さうして「お祖父様只今」といふ聲とともに柔かい小さな手が彼の頭へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、いつまでも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ、勢よくとび上つた。

太郎
馬琴の息宗伯の子

「お祖父様、たい今。」

「お、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、「八犬傳」の著者の皺だらけな顔には別人のやうな悦が輝いた。

茶の間の方では甲高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合せたのらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましてもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣に曝された頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は突然かういひ出した。考へようと努力と、笑ひたいのを耐へようと努力とで、よくぼが何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中ですぐまた語をつぎながら、

「それから。」

「それから——え、と——疝癢を起しちやいけませんつて。」

「おや、それきりかい。」

「まだあるの。」

「どんな事が。」

「え、と——お祖父様はね。今にもつとえらくなりませうからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず真面目な聲を出した。

「もつとくよく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事をいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさな。けふ御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

断然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげな

がら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

浅草の観音
東京市浅草區に
ある金龍山浅草
寺の本尊



里見八犬傳の表紙

かういふとともに、この子供は家内中に聞えさうな聲で、嬉しうに笑ひながら、馬琴につかまるとを恐れるやうに、急いで彼の側から飛退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、轉げるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に嚴肅な何物か、刹那に閃いたのはこの時である。彼の唇には幸福の微笑が浮んだ。それと共に彼の目にはいつ

か涙が一ばいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。この時、孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ、痛癢を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歳かの老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははいつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中にはかすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに従つて、その光のやうなもの、次第に大きさを増して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ……

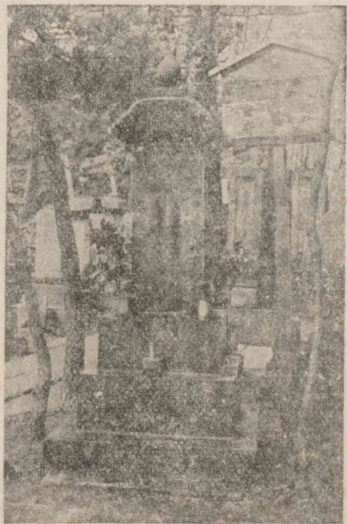
「あせるな。さうして出来るだけ深く考へろ。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうして、それが、刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼には、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生

じて、一氣に紙の上を迂りはじめ。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書きつゞけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處からか溢れて来る。その凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が、萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。



馬琴の墓

「根かぎり書きつゞけろ。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けないかも知れないぞ。」

併し光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。却つて目まぐるしい飛躍のなかにあらゆるものを溺らせながら、澎湃とし

て彼を襲つて来る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を拂つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悦である。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものにと、うして戯作三味の心境が味到されよう。どうして戯作の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ、人生は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか……

その間も、茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には、尪弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめる

のに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の毛の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、悴と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをし

て答へない。お路も黙つて針を運びつゝけた。蟋蟀はこゝでも、

書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

—現代小説全集—

一一 夏の夜

清原深養父

元輔の祖
清少納言の曾祖

月の面白かりける夜、あかつきがたによめる 清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを

藤原敏行

清和天皇より宇
多天皇に歴仕し
た
書道の名人

雲のいづこに月やどるらむ

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

筆蹟

古今倭語集巻第

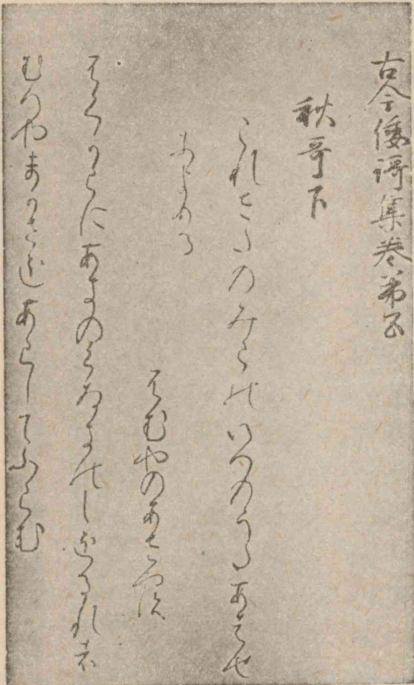
五

秋哥下

これさだのみ
このいへのう
たあはせによ
める ふむや
のあさやす
ふくからにあき
のくさきのしを
るればむべやま
かぜをあらして
ふらむ

古今倭語集巻第

秋哥下



古今和歌集第一部 (筆之貫傳)

大江千里

參議大江吾人の
子
兵部大掾となる

是貞のみこの家の歌合によめる

月みればちびに物こそかなしけれ

大江千里

わが身ひとつの秋にはあらねど
題しらず

讀人しらず

みどりなるひとつ草とぞ春は見し
秋は色々の花にぞありける

歸雁をよめる

伊勢

春霞たつをみすて、行く雁は
花なき里にすみやならへる

讀人しらず

春霞かすみていにしかりがねは

今ぞなくなる秋霧の上に

素性法師

花ざかりに京を見やりてよめる
みわたせば柳櫻をこきまぜて

都ぞ春の錦なりける

伊勢
伊勢守藤原繼盛
の女
當代一の女流歌
人

素性
僧正遍昭在俗の
時の子

僧正遍昭

大納言良岑安世
の男
俗名宗貞
花山の元慶寺の
庵主
花山の僧正とも
稱す
紀友則
古今集の撰者の
一人
撰了前に歿す

はちすの露をみてよめる

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露を玉とあざむく

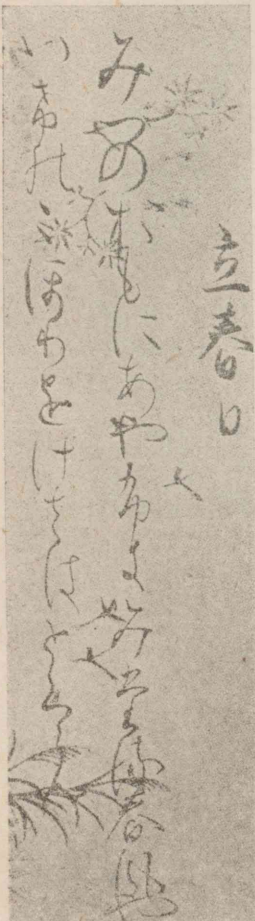
紀友則

梅の花を折りて人におくりける
君ならて誰にか見せむ梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

立春日

筆蹟
立春日
みづのおもにあ
やふきみだる春
風やいけのこほ
りをけさはとく
らん



蹟筆則友紀

坂上是則

定成の子
大内記、清水寺
別當等となる

大和國にまかれりける時に雪の降りける
を見てよめる

坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに

春道列樹
延喜十年文章生
となり二十年壹
岐守となる



中沢重雄

名は重雄
臨川は號
長野縣の人
文學者
大正九年歿(年
四十三)

吉野の里にふれるしら雪

年のはてによめる

春道列樹

昨日といひ今日とくらして飛鳥川

流れて早き月日なりけり

古今和歌集

一三 ベートーヴェンの一生

中澤 臨川

「悲しみを経ての喜び」——これがベートーヴェンの一生の格言であつた。彼の一生は決して野心家を満足させるやうな教訓をも逸話をも有してゐない。それは、苦しんでゐるもののために、そして、眞に苦しむことの出来る力のあるもののために、聖なる悲しみの甘露を恵むのである。

記憶せよ。——特に若い人々のためにいふ。——この世は薔薇の

花の敷かれた街ではない。それは、偉大を希ふものにとつては、常に孤獨と寂寥に追はれなければならぬ山徑である。最も強いものでさへも、或時は悲哀と失望のために、おのづとその頭を垂れな



いではゐられない場合がある。記憶せよ。こんな場合に眞の偉人が汝を助けに来る。ベートーヴェンが汝に役立つ。

凡庸な利害得失の世俗戦に倦れた時、ベートーヴェンの持つてゐるやうな信念と意志の世界に暫くでも身を置くことはどれくらゐ我等にとつて強味であるかよ。偉人の身邊には、言葉にいひあらはすことの出来ない勇氣の感染力がある。

我等は運と偶然とによつて物質界に成功した著名な人達を忘れよう。たゞ心の偉大であつたものだけがヒーローの名に値する。人間の偉大さを計る尺度は人格である。我等は成功を説くまい。要は偉大であることであつて、偉大に見えることではない。偉人の生涯は長い犠牲に外ならない。悲惨な運命が、彼等の肉と靈の苦しみの鐵砧カチカチの上で、彼等の精神を鍛へ上げた。彼等は朝に夕に苦痛と試練のパンを食べた。

彼等は何のためにそれだけ苦しんだのであらう。それは、後の世のより強い仲間を助けるためであり、また力と恵みを與へるためであつた。

ベートーヴェンは、一七七〇年ボンに生まれた。彼の祖父も父も、その土地の王室附の賤しい音楽師であつた。彼の母はやはり貧しいコックの娘であつたが、その夫の酒癖の爲に、一生を一つの

ボン
ドイツの西部ラ
イン河に沿ふ都
會

樂しみも知らないやうにして送つた。

ベートーヴェンは四歳の時からもう音楽を習はせられた。そして残酷な父のために、死ぬほどひどい苦行をさせられた。十一歳の時から或劇場のオーケストラに出て、一家の生計を助けねばならなかつた。

彼は十八歳の時、眞實たよりにしてゐたその母を失つた。彼はその以前から一家の主人役として、二人の弟を育てねばならなかつた。彼の父は酒のために全く仕方のないものになりおぼせてゐたので、その受ける養老金さへ、直接子供の手に渡されるといふやうな始末であつた。かやうな苦い經驗は、一生消しがたい深い印象を若い音楽家の胸に與へた。

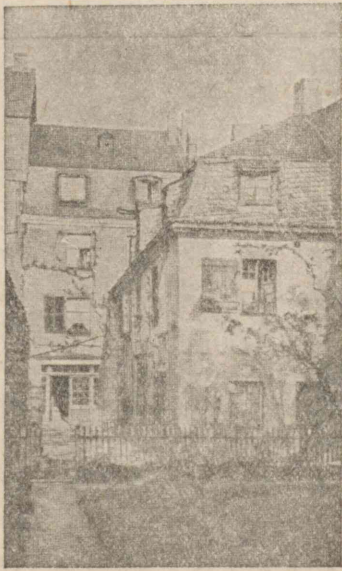
一七九二年、彼はウインナへ去つた。傷ましい生活の中にも、流石に若く美しい夢をはぐくんだ靜かなライン川の岸邊を見棄て

ウインナ
オーストリアの
首府

ライン川
アルプス山系に
發し北海に注ぐ
河

ることが、どんなに惜まれたことであらう。「我が故郷！そこは私
が始めて日の光を見たところ、今も昔のやうに美しいところ」とい
つて、彼は一生その故郷を慕つた。

その頃から彼の天才が漸く芽を吹きかけた。一七九六年彼は
自分の手帳にかう書きつけ
た。「勇氣。私の身體の虚弱
なのにもかゝはず、私の天
才は前途に輝くであらう；
二十五歳！この年齢に今私
は達した……この年齢は人
間がその全部を發揮せねばならぬ時だ。」彼はまたかういつた。
「私の藝術は貧しいものを救ふより外の目的に捧げられてはなら
ぬ。」



家生のンエヴァートーベ

ちやうど、その頃から、また最大の不幸が彼の身體に一生の宿を
取つた。彼は聾になり初めた。世に音楽家はその耳を失ふこと
ほど悲しむべきことがあらうか。彼は堪へることの出来ないほ
どの苦痛を忍んで、幾年かの間それを人に祕してゐた。しかし
よいよ回復の見込の立たなくなつた
時、劇しい絶望を以て、これを友達に打
明けなければならなかつた。「親愛な
る友よ。お前のベートーヴェンほど
不幸なものはない。私の一番貴い部
分である聽感が、今私を見捨てつゝある……私の愛する凡てのも
の、私に親愛なあらゆるものを捨ててまで、このみじめな邪慳な世
の中に生き永らへなければならぬ私の一生は、どんなに悲惨で
あらう。私はしばしば、この身を呪つた……私はブルタークから



自畫像

ブルターク
古代ギリシヤの

哲學者・傳記作者
「英雄傳」の著者

忍従の徳を教はつた。出来ることなら、私の運命が私に與へたところに堪へ忍ぼうと思ふ。しかし、この廣い天が下にも、私ほど不幸な生き物があるだらうかと、つらく考へ悩むことがある——忍従よ。悲しい隠れ場所よ、たつた一つの私の隠れ場所よ。」

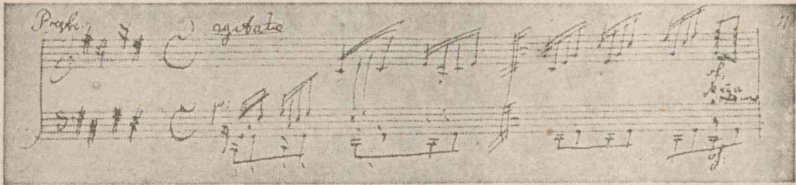
一八〇六年、彼はフランスウィック女史と婚約をした。しかるに、この平和もまた永く續かなかつた。彼等は互に相愛しながらも、自然に遠ざかつてしまつた。

それから、ずつと孤獨の生活が續いた。しかも、それは洗ふやうな赤貧と不遇の生涯であつた。彼は靴がなくて外へ出られなかつたりした。「私は殆ど乞食のやうだ」と、彼はいつてゐた。或有名な曲を出した時などには、僅か七冊しか賣れなかつた。

愛も野心も去つた後、彼に残されたものはたゞ力だけであつた。その力の喜びと、これを表現する必要とが彼を占領した。一八一

バッカス
ギリシャ神話の
酒の神

ナポレオン
フランス皇帝
(西紀一八一六
三)



ベートーヴェン自筆の樂譜

二年、彼を見た一人は、どんな皇帝でも、曾て彼のやうに自分の力を意識したものはない。」といつた。
當時、或者は、彼の曲をさして、醉漢の音樂だ。」といつた。確かに醉漢の音樂だ。しかし、彼は自らかういつた。「俺は人類のために喜びの神酒の口を開けてやるバッカスだ。俺は精神の聖狂を人間に與へる醉漢だ。」

彼はナポレオンを見てかういつた。「俺が音樂の術を知つてゐるやうに戰術を知つてゐれば、彼に教へてやるものを」と。彼の容貌はナポレオンによく似てゐた、殊にその意志を現はす引締まつた口元が。この未來の人道を目的としてその一生を捧げた偉大な靈は、一八二七年、五十七歳を一期として靜か

な往生を遂げた。彼は息を引取る前に、自分の一生を顧みてかういつた。「喜劇の終。」その日は殊に嵐が劇しかった、二月の寒い空にはふぶきがして。

「悲しみを経ての喜び」彼ぐらゐ聖い喜びに憧れたものはなかつた。彼は悲惨な生活のどん底から、未來の人類のために、「喜悅」の福音を歌はうと思つた。彼は幾度かためらひ、幾度か失敗した後で、とうとう晩年にその希望を實現した。「第九旋律曲」といふのがそれである。

その曲の中途に、オーケストラが急に停まつたかと思ふと、深い神秘的沈黙がやゝ暫く続く。そして、「喜悅」の神が優しい静かな歩みを以て人の心の悲しみを見舞ふ。次第々々にそれが我等の全身を占領し、やがて狂熱の形に變る。そして、嵐の中のリヤ王のやうな暴狂に移つた後で、それがまた静かな宗教的法悅の境に入り、

リヤ王
シエークスビヤ
作の戯曲中の人物

最後は聖愛の無我郷で曲が結ばれる。

何がかやうな勝利と並ぶことが出来るか。オーステルリッツの戦勝も、この永世の凱歌の前には、はかない一場の夢ではないか。偉大な生の熱愛者。彼の口からは常に喜悅の聲が洩れた——不幸が彼の命を奪はうとしたその日でさへ、「お、かうも美しい人生よ。」と。また、私は私の生涯を千たびでも繰返したいと思ふ。」と。

苦しむものよ、苦しむ力のあるものよ。汝のためには、この偉人の一生ほど好い慰安と刺戟はない。彼は自分が悲惨の頂點にある時でさへ、彼の實例が後世の苦しむもののために助となることを望んだ。そして、かういつた。「憐むべき忍苦者は——己と同じやうな一人の人間——あらゆる自然の障害にもかゝはらず、男らしい男になるために、その全力を盡した一人の人間を、こゝに見出して慰安を感じるであらう。」と。

—嵐の前—

オーステルリッツ
當時のオースト
リヤハンガリ
ヤにあり
ナポレオンが露
奥聯合軍を破つ
た地

太政の入道
平清盛

一四 小松内府

(平家物語)

太政の入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に黒絲絨の腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋絨の鎧着て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかと思ふぞ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一、宮の御事は故刑部卿の殿の養君にてましまし、かば旁、見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて



平重盛

(筆一惠田福)

先をかけたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道随分身を捨て、兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛めしに至るまで、君の御爲にすてに命を失はんとすることたび



平 情 盛

たびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不当人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵とな

つて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼はや成親の卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召され候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、ただ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ

候ひつれ。と申しければ、大臣、何によつてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、けさの禪門の氣色、さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。



平 重 盛

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろ／＼の直垂に思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外諸國の受領、衛府諸司などは縁にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿などを引きそばめ、引きそばめ、馬の腹帯を固め、胄の緒を締め、ただ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外に

ぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするさまにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はんこと、さすが面はゆう恥づかしうや思はれはん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹の衣を、あわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを、隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこともなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

稍あつて入道宣ひけるは、あの成親の卿が謀叛はことの數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御

五戒
佛教で不殺生・
不偷盜・不邪淫・
不妄語・不飲酒
の五つの戒を云
ふ
五常
儒教でいふ仁・
義・禮・智・信

幸をなし參らせんと思ふはいかに」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに」とあきれ給へば、稍あつて大臣涙をおさへて、この仰せ承り候に、御運ははや末になりぬと覚え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見參らせ候に、更に現とも覚え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くにあらざや。就中出家の御身なり。法衣を脱捨てて、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しまさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたがた恐ある申し事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。

まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これな

普天の下
普天之下、莫
 非王土(詩經)
 穎川の水
支那堯の代の隠
 士許由の故事、
 首陽山に
 伯夷・叔齊の故
 事

り。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふことなし。さればかの穎川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚暗の身を以て蓮府槐門の位に至る。加之國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に跨ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事すでに露はれ候ひぬ。その上仰せあはせらるゝ成親の卿を

召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて君の御爲には愈、奉公の忠勤をつくし、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば、君も思し召し直すことなどか候はざるべき。

これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずるに、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の嶺よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛まし

千顆萬顆の玉
和漢朗詠集の菅
 三品の一瑩、日
 瑩、風高低千顆
 萬顆之玉、染、枝
 染、浪、表裏一入
 再入之紅」の句
 よりとる

きかな。不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷まされり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、ただ重盛が首を召され候へ。その故は、院



(筆翠文原繪)

重盛の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。ただ末代に生を享けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果

報のほどこそ拙う候へ。ただ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめさめと泣き給へば、その座に並み給へる平家一門の人々、皆袖をぞ濡されける。

入道頼みきつたる内府のかやうに宣へば、世にも力なげにて、いややそれまでのことは思ひも寄り候はず。悪黨どもの申すことに君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなどもや出て來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣たとひいかなるひがごと出て來候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべき。とて、つい立つて中門に出で、侍どもに宣ひけるは、ただ今これにて申しつることどもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうのことどもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわぎに見え

つる間、まづ歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛が頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

その後、大臣、主馬の判官盛國を召して、重盛こそけさより別して天下の大事を聞き出したんなれ。われをわれと思はんずるものどもは、物の具して急ぎ參れと催せ」と宣へば、馳せまはつて披露す。おぼろげにては騒ぎ給はぬ人の、かやうの披露のあるは、まことに別の仔細のあるにこそとて、われもわれもと馳せ參る。都の内外にあふれるたる兵ども、あるは鎧着て未だ冑を着ぬもあり。あるは矢負うて未だ弓を持たぬもあり。片鎧ふむやふまずにて、騒いで馳せ參る。

小松殿に騒ぐことありと聞えしかば、西八條に數千騎ありける兵ども、入道にはかうとも申しも入れず、さやめきつれて、みな小松

師走

蓬月(一) 更衣(二) 彌生(三) うづき(四) 皇月(五) 水無月(六) 正月(七) 長月(八) 神無月(九) 正月(一〇) 加藤千蔭 芳宜園と號す 江戸の國學者 文化五年歿(年七十四)

殿へぞ馳せたりける。弓箭にたづさはるほどのものは一人も残らず。筑後守貞能がただ一人候ひけるを、御前へ召して、内府は何と思ひて、これ等をば皆かやうに呼び取るやらん。けさこれにていひつるやうに、淨海が許へ討手などもや向けんずらん」と宣へば、貞能涙をはらくと流して、人も人にこそよらせ給ひ候へ。いかでかただ今さる御事候べき。けさこれにて申させ給ひつる御事どもをばはや皆御後悔ぞ候らんと申しければ、入道、内府に中たがうては悪しかりなんとや思はれけん、法皇迎へ參らせんと思はれける心も和ぎ、急ぎ腹巻ぬぎ置き、素絹の衣に袈裟うちかけて、い

一五 隅田川の雨

加藤 千蔭

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくて、例の隅田川のほ

石濱
今の東京市浅草
橋真土山・今戸
橋一帯の地
隅田川の右岸



(筆重廣)

とり石濱の庵に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも霧立ちわ
たる曉のさまも、處がら世に似ぬものから、こゝは雨のそほ降る日
雨なむ殊にあはれは深かりける。もとよ
り萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の
雫三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下
葉の色づきたるがほろ／＼と散るもあ
はれなり。水の面は動くこともなくて
鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろ
ひて、かつ浮びかつ消ゆる水泡にこそ雨
のけはひはしるかりけれ。みをの一筋
は、さしひく潮にもまじらで、とはにはなだの色に流れいにて、沖に
出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち来るならむ。
うち向ふ岸の榛原のみ濃き墨がきの如くなるが中に、ははその黄

筏師の
隅田川蓑着て下
す筏師にかすむ
あしたの雨をこ
そ知れ (千蔭)



加藤千蔭

ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の
見えわたるに、堤のをちなる梢はやうやうに淡墨もてかきけちた
らむごとく、いとしもはるけきは、ただなびかぬ煙とのみぞ見ゆる。
こゝかしこより鳥の飛びゆきつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげに
おき出でて、川の瀬の眞菰におり
立てば、みさごの群れきて水の面
に浮べるもをかし。上つ瀬より
筏師の蓑笠きて棹を筏の上に横
たへ、おのれたむだきて思ふ事な
げにてをり。筏は水のまにまに
流れ行くもしづげし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり
行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によく似たり。すべてひと
日のうちに筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來

みくまりの神
水分の神
水神の森をいふ
隅田川の左岸

て、岸の木立も、長き堤もあるはあらはれ、あるはかくれて、限なき青
海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてや、
夕暮近くなりゆけば、むら鳥のおのがじし時もとむるに、雁の一つ
ら二つらわたり行くなど、いはむかたなし。暮れはてても、猶行く
水の色のみ遠く残りて、川添小田にいはへるみくまりの神のみあ
かしの、海人のいさりびともいふべく、かすかに見えわたるもあは
れなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田川

たが墨がきのすさびなるらむ

—うけらが花—

一六 天の香具山

太上天皇
後鳥羽天皇

春のはじめのうた

太上 天皇

藤原家隆
後鳥羽天皇の頃
の人
新古今集の撰者
壬生二位と稱せ
らる

ほのくくと春こそ空にきにけらし

天の香具山霞たなびく

攝政太政大臣家百首歌合に春の曙と

いふ心をよみ侍りける

藤原家隆朝臣

霞立つ末の松山ほのくくと

浪にはなる、横雲の空

晚霞といふことをよめる

後徳大寺左大臣

なごの海のかすみの間よりながむれば

入日をあらふおきつしらなみ

皇太后

皇太后宮大夫俊
成

藤原俊忠の子
後白河天皇の時
千載集を撰す
五條三位と稱せ
らる

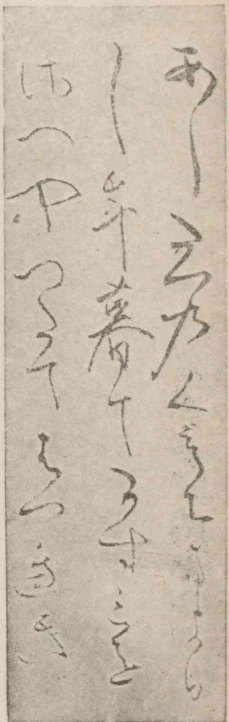
百首歌奉りし時

皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはん山吹の

はなのつゆそふ井出の玉川

筆蹟
あしたべのくも
ちまよひし年暮
てかすみをさへ
やへだてはつべ
き



蹟筆成俊

攝政太政大臣

藤原兼實の子良

經

後鳥羽天皇の頃

の人

五首の歌人々によませ侍り
ける時 夏の歌

攝政太政大臣

うちしめりあやめぞかをる時鳥

なくや五月の雨の夕ぐれ

從三位頼政

源仲政の子

高倉天皇の頃

人

夏月をよめる

庭のおもはまだ乾かぬに夕立の

空さりげなく澄める月かな

從三位頼政

式子内親王

後白河天皇の皇

女

百首歌の中に

ながむれば衣手すゞし久方の

天の河原の秋の夕ぐれ

式子内親王

藤原定家

藤原俊成の子

新古今集の撰者

京極黄門と稱せ

らる

詠下品上生和歌

民部卿藤原定家

うらみかつふゆらんちき

ひよきへきくうんち

ひらぬのすゑらう

えりゆ

西行法師すゝめて百首歌

よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやの秋の夕ぐれ

藤原雅經

擣衣の心を

みよし野の山の秋風さ夜更けて

故里さむく衣うつなり

藤原家隆朝臣

湖邊月といふことを

鳩の海や月の光のうつろへば

なみの花にも秋は見えけり

藤原清輔朝臣

題しらす

冬がれの森のくちばの霜のうへに

おちたる月の影の寒けさ

藤原清輔
藤原顯輔の子
二條天皇の持續
詞花集を撰す

藤原雅經
藤原賴經の子
新古今集の撰者

詠下品上生和歌
民部卿藤原定家
たちかへるゆめ
のたうちををし
へをくうてなの
はなのするのう
はつゆ

慈圓

藤原忠通の子
後堀河天皇の頃
の人
慈鎮和尚と諡せ
らる



透谷

名は門太郎
神奈川縣の人
文學者
明治二十七年歿
(年二十七)

題しらず

庵の雪にわがあとつけて出でつるを
とはれにけりと人やみるらん

前大僧正慈圓

一七 閑居雜記

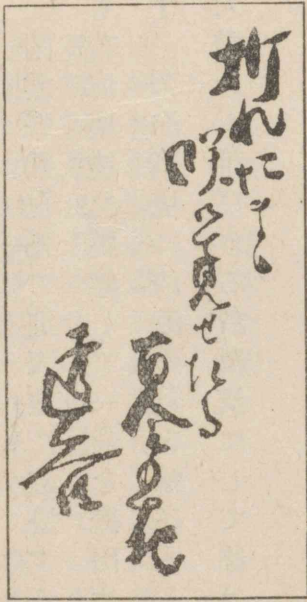
北村 透谷

人間の心中に大文章あり。筆を把り机に對する時に於てより
も、黙居冥坐する時に於て、燦爛たる光明を發する事多し。心中の
文章によりて心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の
文章を装はんとするは、文字の賊なるべし。古より卓犖不羈の士、
往々にして文章を事とするを喜ばず。文字の賊とならんよりも
心中の文章に甘んじたればならむ。

身心を放ちて冥然として天道に任せんか、身心を收めて凝然と

筆蹟
折れたまゝ、咲い
て見せたる百合
の花 透谷

バイロン
英國の詩人
(西紀二八八一—
二四)



透谷筆蹟

ち現身の我に還る。自然
は我を弄するに似て弄せ
ざるを感得すれば、虚も無
く實もなし。

世にありがたき至實は涙なるべし。涙なくしては情もなからむ。
涙なくしては誠もなからむ。狂ひに狂ひしバイロンに對しては細
繩程の役にも立たざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繫
ぎ止むるはこの實なるべし。遠く行く人の足を踏み止まらずも
の、猛き勇士の心を弱くするもの、情違ひ歡薄らぎたる間柄を緊め

固むるもの、涙の外には求めがたし。人の世に涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を擧げて主宰とすることあらば、甚だしく悲しきことは跡を絶つに庶幾がらんか。

閑雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海塵境を脱離して一身を挺出せんとするは、人間の道にあらず。苦海塵境に清涼の氣を輸び入るゝにあらざれば、詩人は一为天職をも帯びざる放蕩漢にして終はらんのみ。

大なる「悔改」はまた一個の大信仰なり。「罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし」とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて、明日の是を期するは信仰に入るの要諦にして、罪人の

カーライル
英國の文豪
(西紀一七五七—一八三
四)

必ずしも自殺せざるは是を以てなり。罪の重荷は忘れざるによりて忘るゝを得べし。忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

—透谷全集—

一八 曼珠沙華

近松 秋江

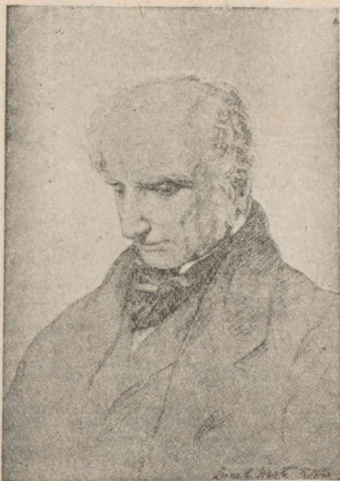
近松秋江
本名は徳田浩司
岡山縣の人
文學者

拜啓、曼珠沙華の油畫、たしかに受領致候間、御安心被下度候。

曼珠沙華は、吾々の生國邊にては、死人花と申し、あまり心持のよき花にては無之候へども、この花を見る時は、種々幼き折の懐かしき聯想、自然に浮かび出で申候ゆゑ、かうして多年生國を離れて、他郷に流寓しをる吾等に取りては、忘れ得ぬものの一つにて候。幼き頭腦に深く印象をのこしたる故郷の山河の形態、種々の自然の色彩、さして勝れたるものとは思はねども、その色々の形の年と共に記憶に新になり行くやうに被存候。英國の湖畔

ウォーヅウォース
英吉利の近代詩
人
(西紀七七一—ス
五)

詩人ウォーヅウォースが、幼時を追憶して、靈魂の不滅を歌へる
長詩の心は、この詩を始めて読みし時には、味解するを得ざりし
が十年を経、二十年を経たる今日、時々思ひ浮かべ候へば、清純な
る我が心の奥に、獨り靜かに省みて、漸く會得出來候やうに存候。



スー・ウヅ・ウォース

今にして思へば、幼時の心は、
恰もこの曼珠沙華の咲き溢れ
たる初秋の野邊の照り輝く日
の光の如く麗かにして、かつ清
純なりきと申候べきか。盛夏
の炎威次第に衰へて、大空の色
いつしか鏡の如く明らかになり、爽かなる初秋の風の野をわた
る頃になり、鎮守の宮の馬場、西北の山裾なる水車小屋に通ふ土
堤、田圃の中の小渠の縁などに、眼の覺むるやうなる眞紅の曼珠

沙華は眞直なる細莖を抜きて咲きつつ、うら盆過ぎて月曆八朔
の頃より一しきり盛んに出づる赤蜻蛉は、沍えたる初秋の日を
浴びて、その花の上に群れ飛べる村里の野末の光景、そぞろに想
起され候。其等の光景の間に
遊び暮らしたりし吾が幼時の
心は、今に至りて明かに懐しき
追憶となりて残り居り候。

小生先般三箇月の山居を果
して、叡山を下りて歸洛せんと
する際、江州坂本日吉の馬場に



華沙珠曼

て、この花の咲けるを見て、ふと如上の遠き往時を憶ひ出で申候。
この花は年中大都會の中に在りて暮らす者には、終に見る機會
もなく過ぎ申候。吾等先日坂本にて見たるは、何年ぶりなりし

か記憶致さず、多分前申しし通り、二十餘年前の幼時に、故郷の野邊にて見し以來の事と存候。それ故に、かゝる多くの人の殆ど見向きもせざる野花に、心を惹かれたるものならんと存候。

曼珠沙華の生花を室内にて眺むることは、いかなれども、かく油畫にして壁間に掲げ、この花によりて吾が往時を追憶するは、吾が唯今の單調・枯淡なる生活に、少しなりとも潤あらしむる手段と存じ貴君にこの畫の創作を囑したる次第に候。人に見せんとするにもあらず、ただ吾が記憶に感興を生ぜしむれば足り候。然るになかく、巧みなる出來榮えにて、満足に存候。

私事、先月十三日より輕微なる風邪にて引籠り居り候。昨年は丁度今時分、歸郷の折柄流行の世界風邪に罹り、五六日間臥褥致候。今年はややの事なきやう、随分用心致し居り候。十月なかばの小春日の暖さに、つい薄着をしながら假寐したる間に

引きしものと覺え候。家にばかり閉ぢ籠り候間にも、四圍の風物次第に移り、二階の窓より眺むる東山の樹々、連日色づき申候。吾等随分長く京都に逗留致候へども、未だ八瀬・大原を知らず候へば、この秋は必ずそなたへ出遊致度存じ居り候。さだめし野趣深き事ならんと存候。帝國美術院展覽會、十一月二十七日より十二月十一日まで、當地にて開かれ候由の廣告ビラ、其所此所の街辻にかかり居り候。その頃ぜひひ御入洛相成度、今より御待ち申居り候。展覽會の外にも京都には繪畫を鬻ぐ商店、祇園あたりには少からず、それ等をのぞき歩くも興多く候。貴君にはまた格別の事と存候。駿河屋の飴虎屋の饅頭進呈致候、御笑納被下度候。草々

十一月五日

京都東山のほとりより

秋 江

鴨 長明

鎌倉時代の歌人
晩年日野山の庵
に住んだ
建保四年歿（年
六十三）

一九 日野山の奥

鴨 長 明

こゝに六十の露消えがたに及びて、更に末葉のやどりを結べる
ことあり。いはば旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をい
となむが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、また百分が
一にだにも及ばず。とかくいふほどに、齡は年々にかたぶき、住家
は折々に狭し。その家のさま世の常ならず。廣さはわづかに方
丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造
らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛けがねをかけたなり。
もし心に適はぬことあらば、易く外に移さむが爲なり。その改め
造る時、幾ばくの煩がある。積むところ僅かに二輛なり。車の力
を報ゆる外は、さらに他の用途いらす。

いま日野の山奥に跡をかくして後、南に日がくしをさし出して、

竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、うちには西の垣に添へて
阿彌陀の畫像を安置し奉りて落日を受けて眉間のひかりとす。
かの帳の扉に、普賢ならびに不動の像を掛けたり。北の障子の上



鴨 長 明

にちひさき棚をかまへて、黒き皮
籠三四合を置く。すなはち和歌
管絃、往生要集ごとき抄物を入
れたり。かたはらに箏、琵琶おの
おの一張を立つ。東にそへて蕨
のほどもを敷き、つかなみを敷き
て夜の床とす。東の垣に窓をあ
けて、こゝに文机をいだせり。枕
のかたにすびつあり。これを柴
折りくすぶるよすがとす。庵の北
に少地を占め、あばらなる姫垣
をかこひて園とす。すなはちもろく
の藥草を植ゑたり。假の

庵のありさまかくのごとし。

その處のさまをいはば、南に竈あり。岩をたゞみて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたより無きにもあらず。春は藤浪を見る。紫雲の如くにして西の方にほふ。夏は時鳥を聴く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に満てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま罪障に喩へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休みみづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業を修めつべし。かならず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡のしら波に身を寄するあしたには、岡の屋に行きかふ船をながめ

満沙彌

俗名笠麻呂

養老五年出家

同七年筑紫觀世

音寺の別當とな

つた

源都督

源經信

琵琶の名手

承徳元年歿

て満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひ遣りて源都督のながれをならふ。若しあまりの興ある時は、しばく松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳をよろこばしめむともあらず。ひとりしらべ、ひとり詠じてみづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。若しつれづれなる時は、これを友として遊びありく。かれは十六歳われは六十。その齡ことの外なれど、心をなぐさむることはこれおなじ。或はつばなを抜き、岩なしを採る。又ぬかごをもち、芹を摘む。或はすそわの田ゐに至りて、落穂を拾ひてほぐみを作る。若し日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里鳥

羽羽束師を見る。勝地は主なければ、心をなぐさむるに障りなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つづき、炭山を



日野山附近の略図

越え、笠取を過ぎて、岩間にまうて、石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓をたづね、かへるさには、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家苞にす。もし夜静かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の島のかがり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろくくと鳴くを聞きて、父か母かとうた

がひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は埋火を掻きおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて、盡くることなし。況や深く思ひ、深く知られむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこの處に住み、そめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを経たり。假の庵もや、古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を開けば、この山に籠り居て後、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家、又いくそばくぞ。ただ假の庵のみ、のどけくして恐なし。

一方文記

二〇 鉄を持つ英雄

ロビンソンクルソーが漂流して、自分一人の生活を發見したとき、第一に困つたのは、食物であり、衣服であり、住居であつた。それは禽獸にひとしい生活であつた。

これを見ても、人間が自立自存するには、一個人としてはどんなに困難であるかがわかる。

自分一人が生きるためには、世の中の何百万人の人が働いてくれたことの一部によつて生活をして居るのである。このことをはつきり考へねばならぬ。

従つて、自分の生活する仕事即ち職業は勿論生活の手段ではあるが、それは決して生活のためばかりでなく、その職業は自分を生かすとともに他人を生かすことであることを考へねばならぬ。

五尺の體軀は小さいけれども、その五尺の體軀は、世の中の人のため、衣食住、何ものかを供給してゐる。

自己のみを中心として考へれば食ふことに困らねば、働かなくてもよいといふ誤謬に陥る。

自分の生きることは他人を生かす。この點、職業の意義をはつきりさせて置かねばならぬ。

職業の苦勞努力は、その中に非常な意義と楽しみとを發見しなければならぬ。勤勞を樂しみながら、身を立て、世の人からは敬はれ、後世に至つて感謝される人となるやうでなければならぬ。感謝されることを目的とするのではない。自分が生きることは他人を生かすこと——この新しい人生觀を持つて、新しい意味での英雄となることを勤勞の目的とすべきである。

明治維新以來、歐米の文明が非常な勢で侵入してきた。

これは大變結構なことである。わが國現代の文化も歐米の文明に負ふところが大へん多い。

しかしながら、歐米の文化は物質文明である。歐米文化がはいつてきたために生活標準が漸次高くなつてきた。二三十年前と今日とは生活上に非常な變化がある。

これは悪いといふわけではない。今更われわれの生活を二十年三十年の既往にかへすことは、不可能のことであり、また良いことであるともいへない。

ただ、物質文明が非常に進んできた現代の人々に、生活の目的は何か？といふことをあらためてはつきりさせることが必要である。

近世に於て、物質主義と個人主義との文明が発達し、世界を風靡し、既往百年位経過した。このことは決して悪いことではなかつた。

壓迫せられた封建時代から脱出して、その壓迫がとりはられ、各人が自由に競争することが出来、各々の能力を伸ばして競争した。その結果が今日の進歩した時代を現出したのである。

が、この個人主義物質主義は今日では行き詰つた。このやうな主義では世界の平和はもたらされないのみならず、各個人の幸福も亦もたらされないことゝなつてしまつた。

現代の産業はひとり農村といはず、工業も商業も漸次組合の結成を必要とする。従來の個人主義ではこの現代に最も必要な組合の結成が不可能である。時代は進み、個人主義精神から共同精神にうつりつゝある。自分を生かすといふことのみを考へる時、個人主義に一面の眞理があるけれども、そのまま、何處までも進めば、遂に共同出来ないのである。ここに於て共同生活と個人生活

との連繫をはつきりつかまなくてはならぬ。そこに洗煉された個人主義(共同生活の一員である自分一人)が、即ち共同主義の自分であることを知るのである。又そこに、勤勞即ち充實した人生そのものと考へることが出来るのである。

現代には、自分の仕事は生活の手段であつて、自分の生活はその時間以外であるといふ考の人が相當澤山ある。日本ばかりではなく、物質文明の進んだ國ほど、その一部になかなか多い。この物質文明からくる人生觀の大錯誤を打破しなければならぬ。

それがためには、勤勞即ち「樂しみ」と考へるやうにすることであるが、それに二つの考へ方がある。

一、勤勞は、自分の生きる手段であるのみならず、天下を生かすことであると考へること。

二、勤勞生活を務めてあり、義務であると考へずに、仕事を自分の

愉快な生活として何か研究工夫して、新機軸を出さうと考へること。

研究工夫といふことには、自分の精神の創作があらはれてくる。

人間にとつては自己の創作、創造ほど愉快なことはない。創作するとき勤勞即ち「樂しみ」である。この考によつて勤勞の苦しみを「樂しみ」とすることである。

曾國藩は、支那清朝末期の大人



物である。彼は大學者であり、大政治家であり、大軍人であつた。長髮賊の亂を平定し、末期の清朝をよくさへた人である。その日記は有名なものであるが、六十一歳の時の彼の日記の一節にかういふ意味のことがある。

長髮賊の亂
清の宣宗の時洪
秀全の起した亂

「自分の見聞したもののの中で、一藝一能に達した者で勤勞を厭はぬ士は必ず相當の位置を得てゐる。たとひ一藝一能の士でも苦勞を厭ふ者は、大部分は失敗し、成功しても永續きがしてゐない。依つて自分は六十一歳になるが一日中必ず何か勤勞する。」

「一日なさざれば一日食はず。禪門の大徳、百歩和尚の談もこれと同じ意味である。」

殊に農業ほど勤勞を必至とし、創造創作の機會を多く持ち、自己のためになると同時に、世の中のためになるといふことがはつきりしてゐる職業はない。

而も新しい目標、共同主義、共同生活を實行し、共同生活を確立するのに一番便利なのは農村である。今後の社會の進歩改善をして行く策源地は何より農村である。新しい人生觀が農村から生まれ、來、新鮮な人生の目標が農村に高く掲げられなければなら

ぬ。といつて私は都會を無視するわけではない。都會の工業が盛んであればある程、これを培養して行くのは農村である。農村と共に、都會も農村の精神を以て進まなければならぬと思ふ。

徒らに時代の尖端が示す物質文明の國を、これこそわれわれの求むべきものであり、進むべき道であると思ふことは大いなる間違ひである。

また新しい人生觀、共同主義の訓練、習慣をなすには、青年團ほど相當な團體はない。自治共同は從來のやうな空漠とした共同でなく、産業そのものに即した自治共同であつて、自分の社會的立場をはつきり自覺する者によつて結ばれた共同でなければならぬ。青年團ばかりでなく、壯年團の組織もまた肝要なことである。

青年諸子よ！來るべき時代は諸君の時代である。

その時こそは、正しからざるものは除かれ、濁れるものは清めら

れ沈滞せるものは潑刺となり、摸倣は獨創にその光を奪はれ、怠惰は努力にその席を譲り、抗争と紛亂とは、整調と諧和とが執つてかはるのでなければならぬ。

英雄よ出てよ！自然に鉄をかついだまゝの英雄よ出てよ！かういふ英雄であれば努力によつて誰でもなり得る。各自の仕事の中で、たまたま天下を刮目せしむることが出来れば、これ天下の英雄である。しかし天下を刮目せしむるか否かは問題でない。天に一物を加へ得たるもの、これ英雄である。

天下にこの氣溢るゝのとき、國家の充實もまた非常なものがある。世界の何物をも恐れない。

英雄兒よ、出てよ、次の時代に着目して、職業の上に、新しい人生觀を確立する英雄兒よ！出てよ！

—後藤文夫の講演に據る—

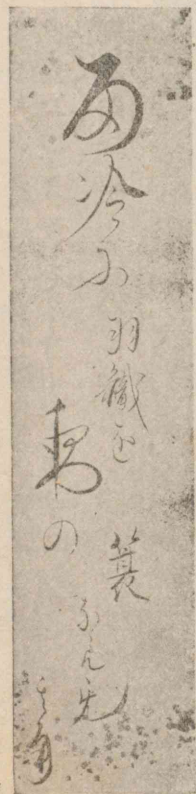
二一名 月

あかくと日はつれなくも秋の風
草枕犬もしぐるるか夜の聲

芭蕉

名月や疊の上に松の影
冬來ては案山子にとまる鳥かな

其角



其角筆蹟

嵐雪

黄菊白菊その外の名はなくもがな

二一名 月

芭蕉

松尾氏
伊賀の人
元祿七年歿

其角

榎本氏
江戸の人
寶永四年歿

筆蹟

雨冷に羽織を夜の
装ならん
其角

嵐雪

服部氏
淡路の人
寶永四年歿

丈草

内藤氏
尾張の人
元禄十七年歿

筆蹟

わたり鳥啼は故郷の唱かや
丈草

去來

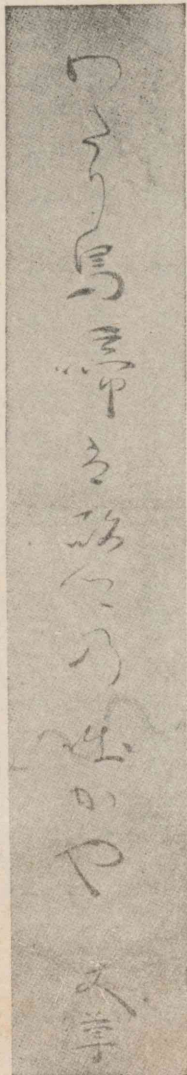
向井氏
肥前の人
寶永元年歿

惟然

廣瀬氏
美濃の人
寶永七年歿

ふとん着て寝たる姿や東山

行燈にとぶや袂のきりぎりす
幾人か時雨かけぬく瀬田の橋



丈草筆蹟

丈草

去來

惟然

秋風や白木の弓に弦はらむ
應々といへど叩くや雪の門
別る、や柿食ひながら坂の上
水鳥やむかふの岸へつういく

凡兆

凡兆
春花園と號す
加賀の人
歿年不詳

筆蹟

山吹のつぼみも
青し芳野河
凡兆

越人

越智氏
肥後の人
元禄十五年歿



呼内雄氏

逍遙は號
愛知縣の人
文學博士
昭和十年歿

百舌鳥なくや入日さし込む女松原
ながくと川一筋や雪の原



凡兆筆蹟

越人

霧はれて棧は目もふさがれず
初雪を見てから顔を洗ひけり

二二 長柄堤の曙

坪内 逍遙

晨雞再び鳴いて残月薄く征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや
分れゆく横雲や残んの星を一つづつ鐘が消し行くいなめの

長柄堤
今の大阪市北區
と西成區との間
長柄川の堤
茨木
大阪府三島郡茨
木町

長柄堤に秋闌けて、一村蘆に風黒く、有明凄き大川水逝きて歸らぬ浪の音、狭霧に咽び白けゆく千草が蔭の蟲の聲、哀はいとままさるらん。片桐市正いこのま且元は居城茨木へ立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、丑の刻に邸を立つて、大阪坂をあとになし、列を正してしづしづと長柄堤に差懸る。(中略)

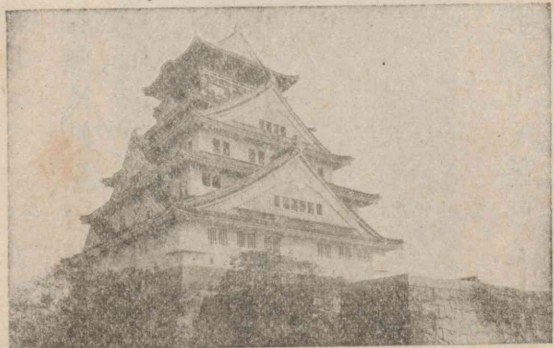
後には何か一思案、寂然として駒立つる長柄堤の有明がた、時に轉る小鳥の聲、川霧やうく、晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に一筋騰る朝煙、くたかけの聲、勇ましく、生氣溢る、東の空には似ぬや入る方の月、すさまじき柳蔭、枯葉枝疎にして風飄々、見る目も昏し、遠方におぼろくと現る、名におほ阪の四衢八街、悄然として寂しげに一棟高く聳ゆるは、市にお、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、

加藤肥州
加藤清正
肥後守

まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存ずる者才略乏しく、阿附黨同して相鬪げば、大政所の御方さへ、當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有様。唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池もその甲斐なく、

いひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊かも忘れざれど、御運の末か、情なや、この且元がすること、爲すこと、いすかの嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆にもと迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。『御家長へに康かれ。』と祝ひし文字が本となり、降つて涌いたる難



(在現) 城 阪 大

千姫君
徳川秀忠の女
秀頼の室
毘盧舍那佛
京都方廣寺の大
佛をさす

題は、只前門の虎にして後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること御運の末といひながら、

市「詠へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「是しかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の巽に罹り、仰せつけられし御遺命に背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ふ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元がこの腸はちぎるゝばかり、償ひ難き不臣の罪はあの世で御詫仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く両手をつき、人目なければ、やゝしばし不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、我ながら不覺の至。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし。心許なきことどもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音。程もあらせ

ず只一騎、殘霧つんざき一散に、汗馬に、中を走り來る木村長門守
重成、

長「市正殿に候な。」

市「長門殿待ちかねしぞ。」

いふ間にか、け寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、言葉はなくてそゞろにもまづ袖濡るゝ、朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入り



(劇) 成重と元旦

がたの月ゆらめきて、老いゆく秋の寂しさを長柄堤に留むらん。長「最早豊臣の御社稷も愈々末となつたるか、棟梁とたのむ足下まで、佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の

織田入道
織田信雄常眞入道
寛永七年歿

その間に思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下に御討手と昨朝承り、大いに驚き、すぐにお表へ參入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿、日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て、只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。この上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して、無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ふ甲斐なさ。」

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申せし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にあらじ。某とてもこの度の一條遺恨骨に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至。大切なるはお家の後事。某退去の事、關東に聞えなば破綻生

ぜんこと治定なるに、昨日までは去就を定めざりし織田殿已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆泡沫。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」

長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」

市「されば今御城に、兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事か、ねど、得難きは智謀の將なり。某之を慮り、萬一の備をなし置きたり。」

長「してその智謀の將とは。」

市「いま九度山に隠れ忍ぶ、信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故大閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、螫して世の態を窺へるを、先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以ていそぎ彼を招かるべし。合

九度山
和歌山縣伊都郡
九度山町
高野山北口
眞田安房守
名は昌幸
慶長三年歿

戦の進退は一切彼の人に任せられよ。その他關ヶ原の一亂以後浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人後藤又兵衛基次、いづれも得易からぬ良將なるが、豫て因みは附け置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳參ぜん。これ第一の手配なり。」

長「してまた籠城となつたる曉敵を防がん手配りは。」

市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐出させ、商業のためと伴り、紀州川の川上より浪華津に押流させ、御船入りに積置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」

長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」

市「甲冑兵具も乏しからず。」

長「城は名に負ふ南山不落。」

市「眞田・後藤の智勇をもて、この堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、」

長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻寄すとも、」

市「なか／＼三年四年が程には攻落さんこと難かるべし。」

長「まつた若年には候へども、愈軍始りなば、我亦一方を承り、速水御宿和久等と共に忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の吹籬さん、白旗は、祖先佐々木が四つ目結、君臣將士



(面臺舞) 別訣の堤柄長

心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利欲に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。この上は仰せに従ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配りせん。御心安かれ市正殿。市ほ、頼もし、頼もし。只大切は上下の一致、必ず忠勤勵まれよ。とはいひながら、往時いんじに照し、成行く末をかんがみれば。長、淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野渡邊。市、上御發明に渡らせらるれど、長、讒佞之を蔽ふが故。市、地の利はあれども人の和なく、長、故大闇が御威武にをの、き震ひ打伏せし六十餘州の民草も、市、天の時にや、大御所のおのづからなる徳風にいつしか靡く世の有様。長、如何なれば、かくまでに御運かたぶく西天の。

市「有明の影薄れつゝ、」

長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくたかけは、」

市「新日、東天に昇るといふ」

長「世の成行の」

二人「影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月ながめ入り、しばしは愚痴におちかた寺耳驚かす鐘の聲、夜はほのく、と明けにけり。

— 桐一葉 —

二三 恩賜の御衣

(大)

鏡)

醍醐の帝の御時、時平の大臣、左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原の大臣は右大臣の位におはします。そのをり、帝御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下させた

まへりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけむ。共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はざえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才



菅原道真 (橋本雅邦筆)

もことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覺えことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、

昌泰四年
醍醐天皇の御代

さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出て来て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて、流され給ふ。この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは

皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ」と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思召して御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

あるじなしとて春なわすれそ

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ

君しがらみとなりてとゞめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、哀れに心細く

山崎
今の京都府乙訓郡大山崎村山崎

亭子の帝
宇多法皇

おぼされて、

君がすむ宿の梢をゆくくと

隠るゝまでもかへりみしはや

また播磨の國におはしましつきて、明石の驛といふ處に御宿り
せしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて作らせ給
へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ
夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり

なげきよりこそもえはじめけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれとびゆく雲の歸り來る

かげ見るときぞなほ頼まるゝ

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゝへる水の底までも

きよき心は月ぞてらさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げ

に月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします處の御門もかためて

おはします。大貳の居處は遙かなれども

樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じや

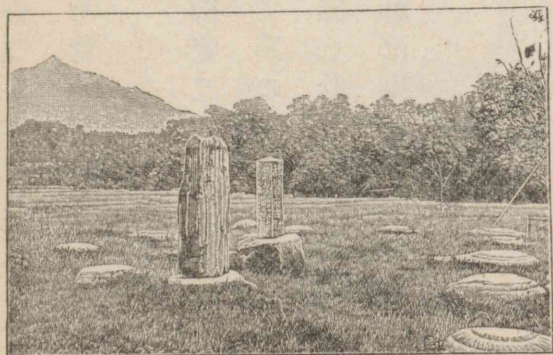
られけるに、又いと近く觀音寺といふ寺の

ありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ

給へる詩ぞかし。

都府樓、纔看瓦色。

觀音寺、只聽鐘聲。



都督府跡

大貳

太宰大貳藤原興
範

觀音寺

福岡縣筑紫郡水
城村觀世音寺

文集
白氏文集
七十一卷
白居易
字は樂天
唐の詩人

これは「文集の白居易が遺愛寺鐘、敲枕聽香爐峯、雪撥簾看」といふ詩にもまさゞまに作らしめたまへり。」とこそ昔の博士どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしゝとき九月のこよひ内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしく感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞそのをり思召し出でて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

かくてこのおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十五日にうせたまひしぞかし。御年五十九。

延喜三年
醍醐天皇の御代

二四 青空の鐘

三 木 露 風

三木露風
名は操
兵庫縣の人
詩人

青空の
高きところ

鈴形の鐘懸かる

あはれその

鐘の音よ

こゝろに染みてひゞく

鳴り鳴りて一の聲は

望の果に

ひろがりゆき



鳴り鳴りて二の聲は
朝あさ暁ひに覺めし村々と都の方の
生活の中に落つ

あはれその

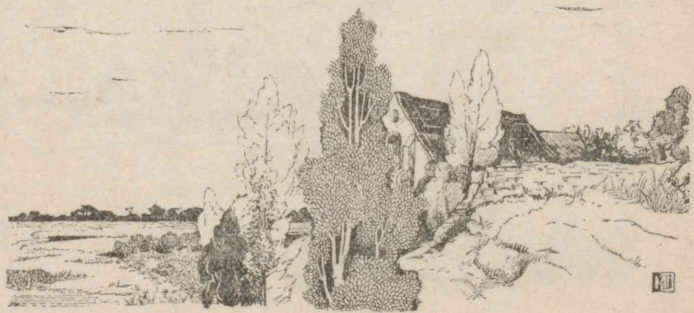
鐘の音ぞ

和平と飛躍とを傳ふなる

氣晴れて

深碧の高きところ

鈴形の鐘懸かる



— 信仰の曙 —

二五 那須與一宗高

(平家物語)

さる程に阿波讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯こゝの洞より十四五騎二十騎打連れく、馳せ來る程に判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ勝負を決すべからず」とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。「あれは如何に」と見ると、船の中より年の齡十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴着たるが、眞紅の扇の日出したるを船のせがいに挟み、陸へ向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に」とのたまへば、「射よ、とこそ候はめ。たゞし大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇

をば射させらるべうもや候らん」と申しければ、判官、味方に射つべき仁は誰かある」と問ひたまへば、手だれども多く候なかに下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にては候へども、手は、きいて候」と申す。判官、證據があるか、「さん候。かけ鳥などを争ひて三つに二つは必ず射落し候」と申しければ、判官、さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一、その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を着ておくびはたそでいろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鎧をぞ差添へたる。滋藤の弓、脇に挟み、甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官、いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし」と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き味方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうもや候らん」と申しければ、判官、大いに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず、それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾く疾く鎌倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば悪しかりなんとやおもひけん。「さ候は、外れんをば存じ候はず、御説にて候へば仕つてこそ見候はめ」とて御前を罷りたち、黒き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向つてぞ歩ませける。味方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、この若者一定仕らんずると覺え候」と申しければ、判官も頼しげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は揺りあげ揺りすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴ならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、南無八幡大菩薩別してはわが國の神明、日光權現宇都宮・那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國に歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな」と心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つて番ひよつ引いてひようと放つ。小兵といふ條十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴りして、過たず扇の

要際一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉、二揉揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箴を敲いてどよめきけり。

二六 夢應の鯉魚

上田 秋成

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像・山水・花鳥を事とせず。寺務の暇ある日は、湖に小舸をうかべて、網引釣する泉郎に錢を與へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、その魚の遊ぶを見ては畫きける程に、年を経て精しきにいたりけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、夢の裏に江に入りて、大小の魚と共に遊ぶ。覺む

上田秋成
大阪の人
國學者
小説家
文化六年殘（年
七十八）
延長
醍醐天皇の御代
の年號
三井寺
滋賀縣大津市に
ある園城寺

ればやがて見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名づけゝり。その繪の妙なるを感じて、乞ひもとむる者前後を争へば、只花鳥山水は乞ふに任せて與へ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人毎に戯れていふ、生を殺し鮮を食ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へず」と。その繪と俳諧と共に天下に聞えけり。一年病にかゝりて、七日を経て忽ちに眼を閉ぢ、息絶えて空しくなりぬ。徒弟友どち集りて、歎き惜みけるが、只胸のあたりの微し暖かなるにぞ、若しやと居めぐりて守りつゝ、三日を経けるに、手足すこし動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐きて、眼を開き、醒めたるが如くに起きあがりて、人々に向ひ、我人事を忘れて既に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ、師三日前に息絶え給ひぬ。寺中の人々を始め、日頃睦まじく語り給ふ殿原も詣で給ひて、葬の事も計り給ひぬれど、只師が胸の暖かなるを見て、柩に藏めてかく守

り侍りしに、今や蘇りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよ」といひて悦びあへり。



興義點頭きていふ、誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて申さんは、法師こそ不思議に生き侍れ。君今酒を酌み、鮮けき鱸を作らしめ給ふ。しばらく宴を罷めて寺に詣でさせ給へ。稀有の物語聞え

まゐらせん。とて、彼の人々のあるさまを見よ。我が詞につゆ違はじ」といふ。使異しみながら、彼の館に往きて、その由をいひ入れて窺ひ見るに、主の助を始め、令弟の十郎、對子掃守など居めぐりて、酒を酌みゐたる、師の詞の違はぬを奇とす。

彼の館の人々この事を聞きて大いに異しみ、先づ箸を止めて、十郎・掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述べ。

興義先づ問うていふ、君試に我が言ふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂へ給ふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにして知らせ給ふや。興義かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて、君が門に入る。君は賢弟と南面の處に碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大きなるを啗ひつゝ、突の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高杯に盛りたる桃を與へ、又杯を賜うて三獻飲ましめたまふ。膾手かじりてしたり顔に魚を取出して、鱸にせしまで、法師がいふ所違はてこそあるらめ。といふに、助の人々この事を聞きて、或は異しみ、或は心地惑ひて、かく、詳つたなる言の由を頻りに尋ぬるに、興義語りていふ、我この頃病に苦しみて堪

へ難きあまり、その死したるをも知らず、熱きこゝち少し冷さんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲居に歸るこゝちす。山となく里となく行きくゞて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に、浴びて遊ばんとて、そこに衣を脱捨て、身を跳らして深きに飛入りつゝ、彼此に泳ぎめぐるに、幼きより水に慣れたるにもあらぬが、思ふに任せて戯れけり。今思へば愚なる夢どころなりき。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝちよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨む心起りぬ。傍に一つの大魚ありていふ。師のねがふこといと易し。待たせ給へ。とて遙かの底に往くと見しに、しばしして冠装束かむらひしたる人の前の大魚に跨りて、許多の鼈魚かめを率ゐて浮び來り、我にむかひていふ。海若わたつみの詔あり。老僧かねて放生の功德多し。今江に入りて魚の遊躍あそびをねがふ。かりに金鯉が眼を授けて、水府の樂み

長等の山
三井寺の西にあ
たる
志賀の大曲
今の唐崎附近か
といふ
比良の高山
滋賀縣滋賀郡に
ある山
堅田
琵琶湖の西岸に
ある
鏡の山
滋賀縣蒲生郡に
ある山
竹生島
琵琶湖中にある
島
伊吹
滋賀縣坂田郡に
ある山
矢橋
滋賀縣栗太郡老
上村
瀬田
滋賀縣栗田郡瀬
田町

をせさせ給ふ。たゞ餌の香しきに味まされて釣の絲に懸り身を喪ふことなかれ。といひて去りて見えずなりぬ。不思議のあまりにおのが身を顧みれば、いつのまにか鱗金光を備へて、一つの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はで、尾を振り鱗を動かして、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山風立ちある浪に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、歩人の裳の裾ぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、かくれかた田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の鴻に宿る月は鏡の山の峯に澄みて、八十の湊の八十隈もなくしておもしろし。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそ驚かるれ。さしも伊吹の山風にあま小舟も漕出づれば、葦間の夢さまされ、矢橋の渡する人の水馴棹を遁れては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び風荒きときは千尋の底に遊ぶ。俄かにも飢ゑて食ほしげなるに、彼

此に漁り得ずして狂ひゆくほどに、たちまち文四が釣を垂るゝにあふ。その餌はなはだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ、我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を吞むべき。とてそこを去る。しばしありて飢ますゝ、甚だしければ、かさねて思ふに、「今は堪へがたし。たとひこの餌を吞むとも、嗚呼に捕られんやは。もとより彼は相識るものなれば、何のはばかりかあらん。」とてつひに餌を吞む。文四はやく絲を收めて我を捕ふ。「こはいかにするぞ。」と叫びぬれども、彼かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が鰓を貫き、葦間に船を繋ぎ、我を籠に押入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に突して遊ばせ給ふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人人大きく感でさせたまふ。我その時人々にむかひ、聲を張りあげて、「かたゞらは興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺に

かへさせたまへ。」と頻りに叫びぬれど、人々知らぬ形にもてなして、
 只手を拍つて喜び給ふ。膾手かしてなるもの、まづ我が兩眼を左手の指
 にてつよく捉へ、右手に礪ぎすませる刀を執りて、俎さにのぼせ、既に
 切るべかりしとき、我苦しさのあまり大聲あげて、佛弟子を害する
 例やある。我を助けよ、助けよ。」と泣き叫びぬれど、聞入れず。終に
 切らるゝと覺えて、夢醒めたり。」と語る。人々大きに感じ異しみ、師
 が物語につきて思ふに、「その度ごとに魚の口の動くを見れど、更に
 聲を出すことなし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議
 なれ。」とて、從者を家に走らしめて、残れる鱠うしほを湖に捨てさせけり。
 興義これより病癒えて、はるかの後天年よはひをもて死まりけり。その
 終焉をわりに臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚、紙
 縑わらをはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。
 その弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院

古き物語
 古今著聞集を指
 す

の殿の障子に鶏を畫きしに、生ける鶏この繪を見て蹴たるよし、古
 き物語に見えたり。 | 雨月物語 |

二七 新島守

(増)

鏡

いつの年よりも五月雨霽間なくて、富士川・天龍などえもいはず
 漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者ど
 ももあやしく難めり。かかれども遂に都に近づくよし聞ゆれば、
 君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治瀬田へ分ち
 遣はす。世の中ひびきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがた
 し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げな
 く騒ぎみちたり。いかがあらんと、君も御心亂れておぼし惑ふ。
 豫ては猛く見えし人々も、まことの際になりぬればいと心あわた
 だしく、色を失ひたる様ども頼もしげなし。

六月二十日
承久三年
泰時
北條義時の長男
時房
義時の弟

保元の例
保元の亂後、崇
徳天皇を讃岐へ
還し奉った例
院の上

後鳥羽天皇

女院
七條院・承明門
院・修明門院等
をさす

鳥羽殿
京都市伏見橋に
あつた離宮

ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らの我身と思は
む(源氏物語)

六月二十日餘りにや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯に、高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ。あづ



後鳥羽天皇

りぬれば、いはん方なくあきれて、上下ただ物にぞ當り惑ふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひおきてつつ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、綱代車のあやしげなるにて、七月六日入らせたまふ。今日を限の御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや。」

信實

藤原隆信の子
出家して寂西と
號した

父子共に肖像畫
の名字

七條院
藤原信隆の女
後鳥羽天皇の御
生母

新院
順徳天皇
帝

仲恭天皇

中院
土御門天皇

とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせたまふらん。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御船に奉りて、遂なる波路をしのぎおはします御心ち、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう、いかなりける世の報にかとうらめし。新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや七月九日、帝をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にておりたまへるためしも、これや始なるらん。

さて上達部・殿上人、それより下、はた残りなく、この事に觸れにし類は、重く軽く罪に當る様いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事いと恐あり」とおぼされて、御心もて、その

若宮
後嵯峨天皇
承明門院
土御門天皇の御
生母御名は在子

年閏十月五日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせたまひぬ。去年の二月ばかりにや若宮いできたまへり。承明門院の御兄せうめい人に通宗の宰相中將とて、若くて失せたまひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉りたまひて、近く侍ひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供仕うまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせたまふ。道すがら雪かさくらし、風吹き荒れ、吹雪して、來しかた往く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなきこと多かるに、

うき世にはかかれとてこそ生れけめ

ことわり知らぬわがなみだかな

せめて近き程に。と東より奏したりければ、後には阿波の國に遷らせたまひにき。

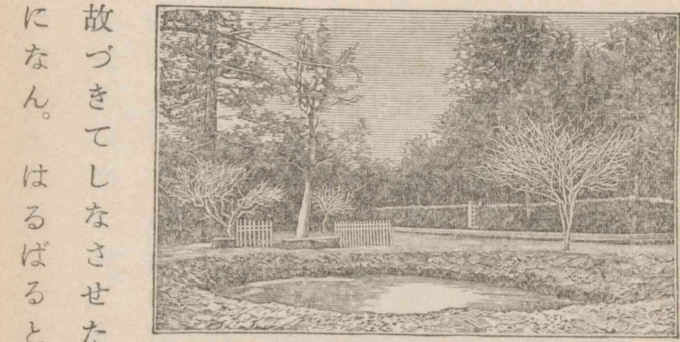
六つにて位に即きたまひて、十三年おはしましき。下りたまひ

津の國のこやの
ひまなき

津の國のこやと
も人をいふべき
にひまこそなけ
れ葦の八重葺
(後拾遺集)

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じことなりしかば、すべて三十、六年が程、この國のあるじとして萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を従へたまへりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりもまされる御有様にて、遠きをあはれみ、近きを撫てたまふ御惠、雨の脚よりも、しげければ、津の國のこやのひまなき政を聞しめすにも、難波の葦の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝をつらねて千代に八千代をかさね霞の洞の御すまひ、幾春を経て空ゆく月日の限知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり／＼てよしなきひとふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣する海士小舟、鹽やく煙の靡く方をも、わが故郷のしるべかとはかりながめすごさせたまふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、

明日知らぬ世のうしろめたさにいと心細かるべし。まいて何時を果とか廻り逢ふべき限だになく雲の波、煙の波の幾重とも知らぬ境に世を盡くし給ふべき御様ども、くちをしともおろかなり。



後鳥羽上皇行在所の址

このおはしますところは、人ばなれ里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に「柴の庵のただし」とかりそめに見えたる御宿りなれど、さるかたになまめかしく、水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりな

柴の庵のただし
ばし
いづくにも住ま
れずばただ住ま
であらむ柴の庵
のしばしなる世
に(新古今集)
水無瀬殿
攝津國三島郡に
あつた離宮

き心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き来るを聞きめして、

われこそは新島守よおきの海の

あらし波風こゝろして吹け

二八 蜂

佐佐木茂索

村山吾一は仲間では、相当知られてゐる洋畫家だつた。腕も可なりの腕だつたが、彼が仲間うちで相当知られてゐるのは、腕といふよりは、寧ろ彼の變に發明好きな點や、妙な事業を計畫したりする事の爲だつた。謂はば彼の有名といふのは風變りな——元來が變り物の多い洋畫家仲間でもちよつと目に立つ風變りな——一言で覆ふと、彼は一種の人氣男だつた。

ある年の正月、彼はその春の展覽會の製作に房州へ行つてゐた

佐々木茂索
京都市の人
文學者

が、一先づ片づいて歸つて來ると、すぐ僕のところへ遊びに來た。

「君あすこはね」と彼は云つた。「あすこはとても變な處だよ。冬だといふのに花が咲いてゐるのだぜ。何しろ冬のことだから、夏ぢやないやね。ね、冬のことだから、時々は東京みたいに寒い日もあるよ。だのに、花がふんだんに咲いてゐるんだぜ。酷くうれしくなつちやつてね、土地の者に聞くと、花は年中咲いてゐるといふんだ。變だらう？そして素敵だらう？俺は、だからよ、大金儲けを考へついたのでよ——」

かう聞くと僕は憮然と形容して然るべき顔で云つた——。

「君の大金儲けか。また例の——」

彼は皆まで云はせなかつた。それのみか一層熱心に説き續けた。

「そんなのぢやないよ。今度は確實なものだ。今までの俺が

仕事しなくちやならない計畫ばかりだつたからね、だから、失敗もしたさ。だけど今度は——今度は、蜂が働くのだからね。」

「蜂が？」

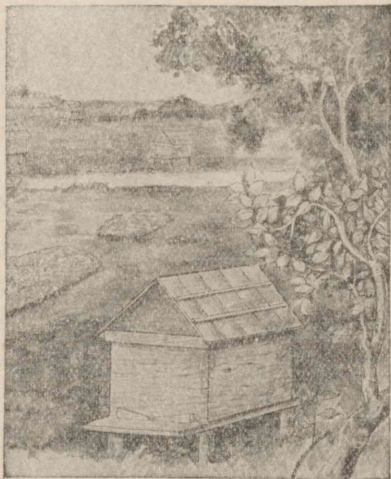
「さうさ。驚いたらう？」

村山はひどく得意だつた。彼の説に聽従するとその素晴らしき花不斷の土地で、養蜂を始めるといふのだつた。年に一度くらい蜂蜜が取れるのぢや、餘程大規模にやらない限り、内職程度にしかならないが、年中取れるからは、十分商賣になるといふのだつた。「何しろ君、蜂が働くのだからね。あの働き好きの蜂が働くのだからね。今度こそは俺も金持になるよ。そしたらお前にも工房でも書齋でも建ててやるよ。」

村山は春の展覽會の用事が片づくと思つて直に房州へ引返して行つ

た。勿論養蜂に従事する爲だつた。仲間うちでは「村山のやつ、また變なことを始めて、手を焼くんだぜ」と云つてゐた。さうして、彼が嘲笑の中心になつたのはいふまでもないのだつた。

するとその冬に村山から「事業は大成功だ」と云つてよこした。だからお前も遊びに來い、蜜をうんと喰はしてやるから」と云つて來た。これが傳はると仲間のうちでは、ほう、村山も時には成功するかね」と批評した。しかしなほ半信半疑なので誰も蜜を喰ひに出かけはしなかつた。



その翌年の冬だつた。あれつきり音沙汰のなかつた村山が飄

然とやつて來て、

「おいまた畫だ。また描くんだよ」と云つた。「畫描きは畫だよ。」

「畫描きは畫だ？養蜂はどうしたんだ？」

「養蜂か。あれか。それがさ——」

村山の云ふところに據ると、最初の年は非常な成功で多量の蜂蜜を得ることが出來たのだつた。それで直ぐさま分蜂して、箱の數を二十倍にもしたのだが、何としたか翌年は少しの蜜も採れないのだつた。彼は驚いて原因を探ねようとした。彼は専門家を叩いてその説を訊いた。するとその専門家は、哈哈と笑つて村山に教へて呉れた——

「——それやあなた駄目ですよ。年中花があるのでせう？ぢや蜂は働きませんよ。蜂が蜜を財めるのは冬に備へるためですからね。その肝心の冬になつても花があると分つては、もうそ

の年から蜂は働きませんよ。最初の一年は知らないから成績がよかつたので、翌年は蜂が心得ちまつたのですから駄目だつたのです。蜂は人間に蜜を供給する爲に勤勉なのぢやありません。彼等の自活の爲ですからね。食へれば蜂だつて働くものですか。蜂は生れつき勤勉だなんて、そんな事は嘘ですよ——。

「かうなんだからね。驚いたよ。」村山は他人の事のやうにのんきな顔をしていつた。だから——畫描きは畫——まあ畫を描いてるんだね。」

僕は、最初村山の計畫を聞いた時とは又別な意味で、憮然とした。

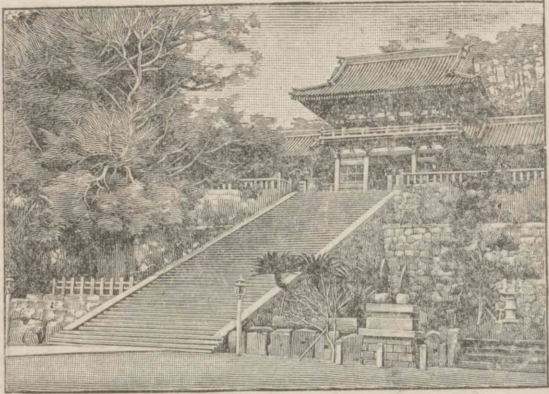
—新選佐佐木茂素全集—

二九 銀の猫

上田 秋成

文治
後鳥羽天皇の御
宇の年號
鎌石の大將殿
源頼朝

文治その年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿鶴が岡の宮居に詣てさせ給ふ。例の事にて御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後べ仕



鎌倉鶴岡八幡宮

うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして疾からず遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へるを、大路に膝折りふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して「あな」ただに言はせず、世にいかめしく尊き御有様なり。

かへりまをしして、御手輿に召させ給ふ程さとき御庇に見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まり居る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと瘦せ黒みづきたるに衣、杖、笠なども乞食者の様したるが、目を偷みてうすずまりをる、な

ほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう名をも問へ」と仰せたるふ。御輿添の若侍急ぎはしり寄りて、「有難く御目賜へり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ」といふ。不意に驚きざまして、「雲水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す」といふ。聞し召されて、「さればこそ聞き知りたれ。穴熊の猛き獲物の類ひならで、賢き人得たる例に、誘ひ歸らん。わが後につきて來れといへ」とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせたまへば、やがておほとなぶら數多照らしかゝげたり。「けふの道行づと將てこ」と仰せたるふ。「法師まるれ」とて、御座近き一間なる所の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひしみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎きの譽れはもの心なきあづま人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂

のなかには玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ」と仰せたるふ。いみじく畏まりて、「思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いと



お月夜

朝 頼

もかゞやかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御眼に見現はされて侍るこそ、いとも有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひあることも打ち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに思し寄せ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に

羽打ちつけて飛ぶ鶴の聲霜枯の淺茅が下の蟲の音いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏しと申す。

うち笑ませ給ひ、弓取りし人の、もとの心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み移すまじきものに、宮人たちは沙汰し給へりとや。軍に出で立ちて、笛鼓の音、馬の嘶きは物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らして御軍には立たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調もいと高しとこそ打ち聞き侍れ。いでや歌よまんとは、ますらを心をとりに隠し、あてになよびかへのみ詠み移すべくするこそ、この道のいみじき煩ひなれ。君がさとく猛き御心のまゝに打ちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあへ奉らん。三尺の劔を取りて、大風起り

大風起り
漢の高祖の作

鳥鵲南に
魏の曹操の作

雲飛揚す。とうたひ、槊を横たへて、鳥鵲南に。と詠ぜし君たちは、鞍のうへにて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、いづれの業にも、初めより優れたらんはかたくこそ侍らめ。といふ。
「人々あれ聴き給へ。世は捨て遁れても、たのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん。一言にても承らばや。」こは益、恐れある御問はせなり。御物語のはては、は、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の瘦法師にだに物問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、をこがましく、何をかは家の傳へなりなどと聞こえ奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈

病める士卒の疽
をすふ
周代の兵法家呉
起の故事

みをさへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を
出でたるいたづらものの弦ひき一つだに心にとゞめしことも侍
らず。たゞ一言の忘れがたきは賞を重くし罰を軽くせよ。といひ
しと任ずるものを辱しむれば危し。といひし有難さよ。士卒の疽
を病めるを吸ひしは、人の心をよく買ひなすといへども、眞の情よ
りとも覺え侍らず。寵を減らして人を危きに陥るは、將帥のさか
しきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。軍を出
だし給へることの怪しきまで賢くましませるを、餘所ながら見聞
き奉るには、この方の御問ひ、免させたまへ。とて、額を板敷に擦りつ
けて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さとき法師なり。今宵は月見る
夜ぞ。物語今ははたしてん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊
ばん。まれびとは酒飲まざるべし。鹿猿の中に立ち交りて歌詠

めといふとも詠むまじ。たゞ我が前にて遊ぶ。風ひや、かなる
にも飽かず飲み物きたなげに食ひちらす人々は暖かにもこそ。



(筆齋容池菊)

西この火取法師に參らせよ。とて、白
と行がねもて作りたる、猫の形したる
銀を取り傳へて、君より賜はる。とて、
猫前に置きたり。鹿猿はなほ心猛

し。鼠をだにえ捕らぬ瘦法師が
ためには、似つかはしき御賜ぞ。と
て、三度押し戴きぬ。

あした御暇賜はりて立ち出づ
るに、御館の人やどりに、誰殿の童
ならん括袴の裾朝露に濡れそぼちて、いと寒げに居るを見て、これ
取らせん、火埋みて手足あたゝめよ。とてかのきら／＼しき物を與

へて、顧みもせず立ちぬ。童うちおどろき、これ見たまへ、見も知らぬ法師の見も知らぬものたまひつるは、とて、青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を、誰かは得させん。拾ひやしつる、といふ。『さらに、道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐ろし、殿に奉りてたまへ』といふ。やがて御館にもてまゐり、仕ふる君を呼び出で、しかく、のことなんと申す。いと怪し。大將殿の法師にたまひしを、いかで童には得させけん。訝し。とて、まづいそぎて聞え奉る。君うち笑みたまひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。ひとたび穢れしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろさせたまひぬ。

漢高
漢の高武帝

西行後にこの事を人に語りていふ、右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはずぞ。漢高の大度、曹孟

曹孟徳
魏の武帝

徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、我が佛の冥福といふことを生まれ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔みまがの、この後やう／＼衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙とゞめ難くして物がたりしとなり。心なき身にも、これを聞き傳へては、秋の夕暮ならずとも、うち聲みぬべし。――藤篋冊子――

三〇 歌人西行

藤岡 東圃

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれしとき、稱讚の聲又定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に噴々たるは、抑、何が故ぞ。

定家
藤原氏
歌人
新古今集の撰者

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死したまへり。とて、若き妻老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念さらけに堅し。官を辭して許されざれども、棄^テ恩^ヲ入^ル無^爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧み

保延
崇徳天皇の御代
の年號

右幕下
右近衛大將源賴
朝
大師
弘法大師

高尾
京都府葛野郡高
雄山神護寺

もせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せりと。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべしと。一介の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適興至れば、則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋の佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべしと。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。

「誰ぞ」と問へば「西行」と申す者」といふ。文覺手ぐすねを引き望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋ね悦びいり候」とて迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子



文 覺

たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰せに違ひたるは」と怪しみ問ふ文覺答へて、「あらいひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面おもて様か、文覺をこそ打たんず

るものなれ」といへりとぞ。
西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて詠じて曰く

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建



久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集

めたるもの即ち山家集なり。
わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後

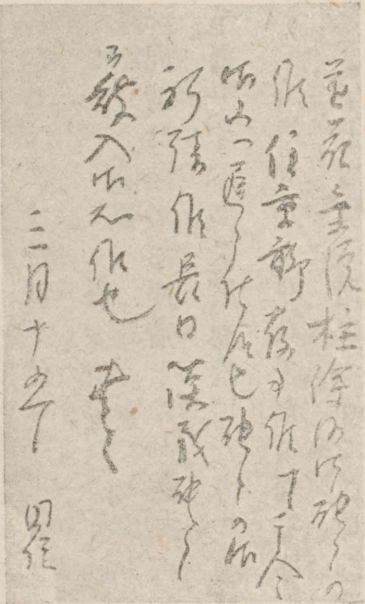
宗祇
飯尾氏
連歌の名家
文應二年歿

とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おのゝその道に一期を劃せし三家がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかにか詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そも、平安朝の貴神淑女は、鴨・桂・二川の流域、數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、情感を刺衝するものなかりければ、従つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承けた、同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる

筆蹟

連花乗院柱繪沙汰、能々可候住京卿存事候て于今御山へ運々仕候也、能々可御祈請候長日談義、能々可被入、御心候也、謹言、三月十五日、圓位



西行筆翰の第一

にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さ

る、ことまた宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、同情の

念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくてうかれなば

松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらじ

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑをしくなる命かな

愛着は迷なり。此の雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず。これを以

て窓前日夜の友とす。清深虚無一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、ここに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ

安く待ちつゝ今日もくらさん

雲にたゞ今宵の月をまかせてん

厭ふとしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

—國文學全史—

三一 日本精神と世界精神

藤村 作

我々は人間として生きると同時に、國民として生きねばならぬことは勿論である。近時若い一部の人達の間には、我々の國民として生きることが第二義のことである、我々は人間として生きねばならぬといつてゐる。併しながら、私の信ずる所では、我々の生活の單位は國民として生きることである、人間として生きること

ではない。どうしてさう考へるかといふと、世界には多くの民族がある。それ等の民族は特殊な血を傳へ、特殊な靈を傳へたものである。我々日本人はその中の一つである所の日本民族に屬する。我々が人間であり得るのは、日本民族であり得ることを通してでなければならぬ。日本民族でなくしては、どうしても人間たり得ることは出來ないのである。

我々の肉體は日本民族の祖先から傳へられた肉體であり、我々の靈魂は日本民族の祖先から分派し來つたものである。さうして、肉體に於ても、靈魂に於ても、あらゆる世界の他の人類から違ふ所の特徴を有して、この特徴を持つことに依つて、世界のあらゆる他の民族から特殊である。この二つの上の特徴を持つてゐるので、我々は何としても他の民族となることを得ないのである。

この同一祖先から傳へた肉體、靈魂の特徴を共通に持つてゐる

我々民族が、團體的結合をなして、その特徴に依つて特殊なる發展をなすことに努力するのは如何にも自然なことである。さうして、かういふ團結ほど世に鞏固な國家團結はない筈である。かういふ我が國の持つ特殊な血族的國家團體は、單に主權人民國土を三要素として成立してゐる國家とは違ふ。

我々が日本國民として世界に生きる意義、使命は、他の民族の持たない特殊な國民性、國民精神を持つて生きるといふ所にあらう。これを發展させ、又これを世界に擴充する所にあらう。我々日本人の最も長じてゐる特徴の上に創造された文化を、世界に擴げることに依つて、我々の最も大きな寄與が世界人類になされるであらう。我々にして日本精神を失墜し、日本國民性を小さくしてしまつたならば、我々の世界に生きる意義は失はれ、我々の世界人類に對する使命は滅びるであらう。この意味に於て、我々は人間として

生きるといふことを考へる前に、日本國民として、最も正しく且大きく生きるといふことを考へねばならない。日本國民として、最も正しく、大きく生きるといふことは、日本精神を展開させ、これを世界に擴充して行くことに他ならない。

苟くも日本人として、我が祖先の肉體と靈魂とを傳へてゐるものに、幾分なりとも、日本精神を持つてゐないものはない筈である。けれども、それを確實に把持し、且それを涵養して益、立派なものにして行くには、どうしても教育の力を借らねばならない。こゝに國民教育に於ける國史教育の必要があり、國語教育の必要があり、國文學教育の必要があるのである。

所がここに考ふべきことがある。世界は時を逐うて變化しつつある。時代は暫くも靜止しない。随つて世界は現状のままに長く止るものでない。國民精神は歴史の悠久を通じて一貫して

傳ふべきものではあるが、併しそれは歴史を超越して不變であるべきものではない。時代の變化に應じて、その不備不足なるものは常に補はれ、その不適當なものは適當なものに改められて行かねばならないものである。即ちその本幹は動かすべきではないが、その枝葉は常に補はれ改められ、又その精神の表れは、常に時代に應じて變化し行くのでなければならぬ。これを解り易くいへば、他の長を採つて、我の短を補うて行くべきものである。ここに於てか國民教育は國民精神の理解涵養と共に、世界精神・現代精神の理解を必要とする。

廣く世界を見渡して見れば、我々は現代に世界を通じて流れてゐる或精神を見出すことは容易である。西洋にある現象が決して西洋に限られないで、我が東洋にも波及して、日本に支那に同じやうな現象の起ることは、一つや二つに止ることではない。交通・

通信機關の發達に由つて、昨日の西洋の事が直に今日東洋に來るといふほどである。これはその底に世界に共通して流るゝ現代精神の在ることを語る事實である。我が日本國は東洋に位置してゐると雖も、日本國民は常にこの世界精神を理解して、世界に適應して變化しつゝ生きて行くことを心掛けねばならない。これを怠るならば、日本精神は固陋に陥り、日本國家は世界に孤立するに至り、それが爲に國家を滅亡に導くこともなるべきである。國家を世界に孤立の地位に立たせるといふことは、單に國交の上でいはるべきでなく、精神的にもいはるべきことである。さうしてこれほど國家の存立・發展に恐るべきことはないのである。

それであるから、我々は傳統の日本精神を縦の絲と見、世界に共通する現代精神を横の絲と見ると、この二つの絲が唯我々の中に不調和に併存するといふのでは困る。若し又この二つの絲が混

亂して、互に相矛盾し、衝突するやうなことがあれば、彌、困る。否、現にこの二つの精神の不調和・矛盾・衝突は社會の現象として現れてゐる。右と左と相分れて互に相争ひ、相打つ状態に在るのである。ここに於てか、我々はこの縦横二つの絲を以て一つの織物を織出すことを志さねばならない。即ちこの二つの精神の調和・統一を目ざして進むことを最も大切な任務としなければならぬ。一面に於ては、日本精神を生かし、これを磨いて益、立派な光を放たしめ、又一方に於ては世界精神にも共鳴を保つやうな、穩健・中庸であり、大きく東西を抱擁し得る精神を養成することを目標として進むことを努めねばならぬ。換言すれば、日本的であると共に、世界的である所の精神を養成しなければならぬ。民族的であると共に、國際的である所の精神を養はねばならない。極左の精神が國家を危殆に導くことは誰しもが戒心してゐる所であるが、又

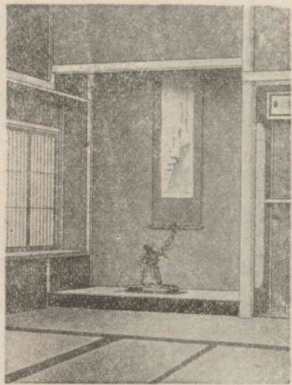
それと同様に極右の精神も亦國家に取つて危険であらねばならない。我々は飽くまでも、日本精神と世界精神との調和・統一を目標として進まねばならない。

三二 日本民族性の特色

河野省三

河野省三
埼玉縣の人
文學博士
國學院大學學長

日本人は、まとまりを愛し、組織を好む傾向がある。三十一文字



の短歌、十七字の詩形が發達したのも、法律制度が比較的によく整備してゐるのも、氏神氏子の關係や、軍隊の紀律や歸化人の同化などに、著しい特徴が見られるのも、此の民族性の傾向による所が多い。

日本の神話も、床の間の藝術も、近世繪畫の魅力も、皆よくこの纏まり組織立つところの心理的傾向の強いことを物語つてゐる。

一君萬民の國體を形成し、又古語拾遺に、
天照大神は惟れ祖惟れ宗、尊きこと與^{ダク}二無^ヒし。爾餘の諸神は惟
れ臣、惟れ子。

といふやうに、神宮を中心として神社組織の發達したのも、やはり
この性向に基いてゐるのである。かういふ民族性の傾向を統一
性と名づけて差支ないと信ずる。

日本人は現世的・實際的・樂天的な性情を有し、快活淡泊な國民で
あるが、而も又一種の幽玄味を持つてゐる。遠い／＼過去の祖先
を畏敬愛慕すると同時に、更に遠い／＼未來の子孫の繁榮を祈つ
て止まないのが、その崇祖觀念の基調である。その神に對する觀
念の一面には極めて靈妙森嚴な性質が内在し、その祭祀にも漂渺
幽玄な趣を具へた方面がある。日本の建國は、天御中主神若しく
は國常立尊の後に幾代かの神々を経て、漸く諾冊二尊の紆餘曲折

した國土經營となり、波瀾變化に富む高天原と葦原中津國との交
渉を遂げて、始めて天孫降臨となり、更に日向三代の治を過ぎ、神武
天皇の東征に依る多年の努力を経て、茲に漸く人皇第一代の建國
創業史が展開されるのである。かやうな無限の過去と不斷の經



神武天皇御尊像
(作謹雲如鳥大・雪如下山)

營とを根柢として、そこに無限の
未來を祝福する天壤無窮の神勅
が實現されて行くのである。
「天地と共に」といふことは日本
人の好んで用ひた譬喩である。

それは慥かに日本精神の幽玄な神祕的な一面の表現である。而
して蓋しそれが日本民族の神といふ觀念の一基調であらう。而
「神ながら言揚げせぬ國」を誇る實行的な日本人が、深遠な哲理と
神祕的な情調とに富む佛教を理解し消化し得た所以も、やはりこ

の民族性の存在に歸することが出来よう。さう云ふ民族性を永遠性と名づけるのである。

日本人は性情の自然な發露を悦ぶ國民である。儒教や佛教や封建社會の禁慾的・節制的な經驗に抑へられて、この天真爛漫な性情若しくは、單純眞率な氣分は少からず變化を爲して居るが、なほその本性には、平易明快を悦び、飾らない、歪まないところの、ありのまゝの天性を愛する心持が強く働いてゐる。古事記や萬葉集の古典思想には極めてよくこの性向が表現されてゐる。

坪内雄藏博士が、日本魂の特性を解剖して、その根本的特質を純(若しくは潔の一字に歸着せしめてゐるのは、蓋しこゝに日本民族性の重點を置いたものである。これは正しく日本の民族性の一特色であつて、純眞性と稱するのが最も妥當である。

坪内雄藏
文學博士
英文學者
戯曲家
昭和十年歿

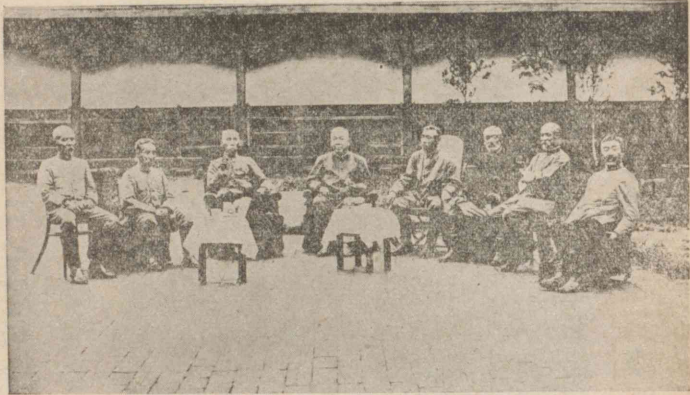
三三 將に將たる大將軍

明治・大正・昭和を通じて、陸の戰將謀將を求むれば、その人必ずしも少しとしないであらうが眞に將に將たるの大將軍を求める時は、轉たその人の擧げ難きを感じてあらう。しかもその中に燦然として輝く人は、吾が元帥大山巖に先づ指を屈しなければなるまい。

彼は世に茫洋として捕捉すべからざる人物の如く解されてゐる。如何にもさうした一面のあつたことは事實であつた。彼は日露戰爭には滿洲軍總司令官の重任を帯びて出征したが、作戰の事は一切を擧げて、これを總參謀長兒玉源太郎に委ねて顧みず、我が軍が如何なる作戰に依つて露軍と戦ひ、又その日の戰鬪の如何なる地點に於て開かるゝやを知らず、砲聲の突如として起るを聽

くや「兒玉さん、今日は何所で戦つてゐますか。」と問ふこと一再でなかつたといふ。

又奉天會戦の起るや、總司令部に於ては兒玉總參謀長以下、不眠不休軍議を凝らしてゐたが、大山は敢へて議に與らず、只その結果を聴くのみであつた。然るに戦線擴大し、死傷續出、戦況意圖の如くならず、總司令部内憂色いと濃やかとなるに及んだ時、大山は突如として口を開き、「兒玉さん、豫備隊に一聯隊だけは、とつておいて下さい。」と言つた。幕僚は總司令官に如何なる奇策があるのか分らなかつたが、この言に依つて急に元氣づいたのであつた。さて會戦後、幕僚の一人が大山に豫備隊一聯隊の理由を尋ねたのに對して、「敵が攻めて來たら、その一聯隊を提げて突撃する氣であつたんだ。」と答へ、一同を啞然たらしめたといふが、彼の頭には戦術も戦略もなかつたらしいのである。



滿洲軍總司令部

斯う聞けば大山といふ人物は、たゞ茫洋として不得要領、一個の木偶に過ぎないかのやうであるが、決して決してさうではなかつた。それを證する幾多の事實がある。

彼は最初必ずしも總司令官として出征するとは決せず、海軍大臣山本權兵衛の如きは、彼に内地に残るのを勧めたほどであつたが、彼は山本に對して、各軍司令官はいづれも一世の雄、他の者ではとても統御が出来ぬ。總司令官は自分でなくては出来ないとあらかずから安心してよい。自分は出か

野津 第四軍司令官
 野津道貫大將
 奥 第二軍司令官
 奥保鞏大將
 乃木 第三軍司令官
 乃木希典大將
 黒木 第一軍司令官
 黒木爲楨大將
 川村 鴨綠江軍司令官
 川村景明大將

けて行つて、ただヂツとして居りさへすればよいのだ」といつたといふ。如何にも軍司令官たる者は野津・奥・乃木・黒木・川村の諸豪であつた。これを統率して一糸紊れざる作戰を遂行することは蓋し容易なことではないのであつて、智謀これをよくせず豪勇これを成し得ないのである。その點において大山は、自ら信ずるところあつてか、この大役を買つて出たのである。

又彼が征途に就くに當り、海相山本權兵衛に向つて、戦鬪の事は不肖これを請合ふをもつて御安心ありたい。但し戦争を止めるには、適當な潮時といふものがある。その時機に就いては、不肖素よりこれを注意するけれども、戦地にゐては彼我の事情がよく分らないために、それを逸するやも測り難い。されば帷幄の樞機に參する卿等がこれを祭して、適當なる時機に軍配をあげられん事を切望する」といつたと。ふ。 茫洋捕捉すべからずと見ゆる大山

の一面には、實に斯様な大局的大見識があつたのである。



滿洲軍總司令官奉天入城

又彼が總司令官に任命さるるに先立ち、我が陸軍は既に第一軍、第二軍、第三軍と續々滿韓の山野に戦つてゐたが、これを統ぶべき總司令官が漸く問題になりかかつて來た頃のことである。參謀本部の部員であつた少佐尾野實信後の大將は、大山に向つて總司令部設置の必要を説いた。

すると大山は、まだ早い。今はまだ我が軍が連戦連勝である。若し負け始めたら自分が出て行く」と言つたといふ。大山が如何にその身の役割を知り、又自ら信じてゐたか、この一言でも分るので

ある。

かうして大局的には頗る要領を得た大山は、その他にも決して
茫洋ではなかつた。凱旋後、子息柏が、總司令官として在任中、何が
一番苦しかつたか、と問うたのに對し、さうさな、知つてゐることを
知らぬ顔してゐたことかな、と答へたといふ。何といふ將軍らし
い心構へであらうか。この心構へがあればこそ、即ち將に將たる
大將軍となり得たのである。

衆に長たる途は、實にデリケートである。況や一世の諸雄に長
たるの途は難中の至難事である。それこそは智にあらず、勇にあ
らず、實に人間の徳にあるのである。天資と修養とを俟つて得ら
れた徳に依るのである。大山の徳は、蓋しその双方より得たるも
のであらうか。

—日本英雄傳—

芭蕉

松尾氏
伊賀の人
元祿時代の俳聖
元祿七年歿（年
五十一）

筆蹟

ほうらいにきか
ばやいせの初便
はせを

三四 梅が香

梅が香にのつと日の出る山路かな
古池や蛙飛び込む水の音
花の雲鐘は上野か浅草か
草の葉を落つるより飛ぶ螢かな

芭蕉



芭蕉筆蹟

荒海や佐渡に横たふ天の川
名月や池をめぐりて夜もすがら

燕村

谷口氏、後與謝
と改む
俳人
天明三年歿（年
六十八）

旅人と我名呼ばれむ初時雨

燕村

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月
花に暮れて我が家遠き野道かな
富士一つ埋み残して若葉かな
牡丹散つて打かさなりぬ二三片

筆蹟

山家に屋どる
猿どの、夜さむ
訪行鬼かな
燕村

燕村筆蹟

名月や夜は人住まぬ峯の茶屋
蕭條として石に日の入る枯野かな
大雪となりけり關のとざし時

一茶

小林氏
信濃の人
俳人
文政十年歿（年
六十五）

一茶

鳴く猫に赤ン目をして手毬かな
門の蝶子が這へばとび這へばとぶ
蟻の道雲の峰よりつゞきけり
人來たら蛙になれよ冷瓜

筆蹟

刈萱堂一茶
花の世は佛の身
さへおや子哉

一茶筆蹟

きりゝしやんとして咲く桔梗かな
うつくしや障子の穴の天の川
寒念佛さては貴殿でありしよな

新編西條震子校

第二学年

中井 高夫

帝國新國文改版

甲種實業
三年制用

卷二

昭和十二年六月九日印 刷
昭和十三年一月十日訂正印刷

昭和十二年六月十二日發 行
昭和十三年一月十三日訂正發行

定價金七拾五錢

不 許
複 製



編 者 藤 村 作

發 行 者 東京市神田區西神田一丁目三
株式帝國書院

代表者 守屋紀美雄

印 刷 者 東京市京橋區銀座西二丁目三
高橋 郁

發 行 所 東京市神田區西神田一丁目三
株式帝國書院

振替口座東京七〇二四

關西販賣所 大阪市東區橫堀四丁目三
三宅莊藏書店

振替口座大阪六九

